

公益財団法人 日本中国国際教育交流協会

【2013年度の歩み 会報第20号】



- 音楽の共生力 第3次宋慶齡基金会教育交流代表団
- 人気の音楽教師養成 第5回易県音楽教師養成セミナー
- 東アジアの絆 第7期安東自由大学
- 最高の体験 第2回教育交流ホームステイ in 山梨

2014年1月発行

■表紙写真

【左上】 第5回易県音楽教師研修（協会が寄贈したキーボードを使っての研修会）

【右上】 第2回教育交流ホームステイ（山梨・甲府駅でホストファミリーと）

【左下】 第7期安東自由大学国際セミナー（日韓中の参加者が安東市国学文化会館にて）

【右下】 第3次宋慶齡基金会教育交流代表团（三重県津市立誠之小学校での交流会）

目 次

■巻頭言 公益財団法人日本中国国際教育交流協会代表理事 黒田文男	1
■第3次宋慶齡基金会教育交流代表団（教育交流・受入事業）	3
（1）三重県庁訪問・津市庁訪問	3
（2）歓迎レセプション	3
（3）津市立誠之小学校での授業参観・交流	4
（4）意見交換会	4
（5）訪日団の感想	5
（6）第3次宋慶齡基金会教育交流代表団	5
（7）交流日程	5
■2013 第5回易県音楽教師養成セミナー参加報告（教育交流・支援事業）	11
（1）易県音楽教師養成セミナー	11
（2）易県第一小学校、大龍華中心小学校訪問	11
（3）中国宋慶齡基金会表敬訪問	14
（4）日本中国国際教育交流協会代表団 主な日程	14
■黒田代表理事らが中国を訪問（教育交流・派遣事業）	14
■第7期安東自由大学参加報告（教育交流・派遣事業）	27
（1）記録・報告	27
①安東自由大学国際セミナーの概要	27
②安東市臥龍初等学校訪問	27
③韓国精神文化の首都 ー安東市を訪問してー	27
④東アジアにおける義務教育の課題（重松清文）	27
⑤中国の義務教育（白立文）	27
⑥第7期安東自由大学日程及び参加者名簿	27
（2）感 想	27
■第2回教育交流ホームステイ in 山梨（教育交流・研究等助成事業）	4
（1）教育交流ホームステイ実施要綱	4
（2）第2回教育交流ホームステイ	4
（3）ホストファミリーからの報告	4
（4）訪問先一例	4
（5）学生報告	4
■第9回日本語作文コンクール（教育交流・研究等助成事業）	4
■資 料	4
（1）2013年度宋慶齡基金会との教育支援に関する協議書	4
（2）会報「共生力」 18号、19号	4
■機関関係	4
（1）平成24（2012）年度事業報告	4
（2）平成25（2013）年度事業計画	4
（3）平成25（2013）年度収支予算書	4
（4）平成25（2013）年度役員・評議員名簿	4
■協会の歩み	4
■編集後記	表紙3

巻頭言



公益財団法人日本中国国際教育交流協会
代表理事 黒田 文男

公益財団法人日本中国国際教育交流協会の事業に対しまして、多くの方々より励ましやご支援を賜り御礼申し上げます。

日本と中国及び韓国の間で、政治的・経済的にぎすぎすした関係が続いていること、大変残念に思います。国同士良好な関係を保持するためには、互いが其々の国の相違を認め、かつ、平和を恒久的に希求することだと思います。政治や経済によつての信頼関係構築では、限界があります。基本は、「草の根」的な交流によつて、信頼が醸成されるものです。つまり、人と人の交流を地道に行うことにあります。そして、それは誰もがどの国でも必要不可欠な教育という人格の完成を目的としたものによることが賢明であります。

当協会と宋慶齡基金会との共同プロジェクトは、小さくはありますが音楽教師の交流及び互いの国の教職員の資質向上を目的とした事業であります。宋慶齡基金会には、エリート教育のための支援事業は存在しますが、教育現場と密着した事業は少ない、そういった意味では、音楽を通しての交流は、ブランド化しているとも言える、と評価していただいております。

2013年11月6日－7日、唐九紅団長（宋慶齡基金会基金部長）を団長としまして、易県の行政（副県長）、教育委員会（教育長）を始め、音楽教師を含めました10人の方々が三重県に来られました。易県との支援交流は7年を経、音楽教師研修会は5年を経過します。この事業は毎年拡充してまいりました。その理由の一つには、易県の教育関係者の全面的な支援があったからだと認識しています。一昨年には、神奈川県に訪中団が来られました。

互いが行き来し、友好を深め、教師としての資質を磨き合う教育交流が定着し始めました。国同士の交流ですと面子やプライドのようなものが妨げになりますが、前述したように教育を媒介とした人の交流には、政治や経済の利害は関係なくなります。

当会は、教育の振興を目的としました公益財団法人であります。国を越え、満足に教育を受けられない子どもたちの支援を行う、又教師同士が学び合う、そういった事業を今後も進めてまいる所存です。多くの都道府県の教育関係者が訪日団を迎え入れしていただくと共に、変わらないご支援を深甚よりお願い申し上げます。

■第3次宋慶齡基金会教育交流代表団（教育交流・受入事業）

第3次宋慶齡基金会教育代表団、三重県での教育交流

（１）三重県庁訪問・津市庁訪問



鈴木知事（右）と唐団長

第3次宋慶齡基金会教育代表団（以下、代表団）は、2013年11月5日～10日の日程で来日し、三重県津市で教育交流を行いました。

代表団は、6日午前には三重県津市庁、午後には三重県庁を訪問しました。

三重県庁訪問では、職員の方々が玄関で迎えていただき、代表団は、たいへん感激されていました。三重県からは、鈴木英敬知事、植田隆副知事、山口千代己教育長の出席を受けました。はじめに鈴木知事から、宋慶齡基金会は素晴らしい事業をされている、これからは民間での人材交流をとおして両国の交流が深まることを期待しているとの歓迎のあいさつがあり、続いて、代表団団長の宋慶齡基金会基金部唐九紅部長から、たくさんの成果を得て子どもたちに活かしていくことになると思

いますと、今回の訪問に対する感謝の言葉が述べられました。

その後、三重県の紹介を受け、副団長の易県人民政府、王東風易県副県長からは、易県の自然や歴史、教育について紹介があり、親しく歓談が行われました。歓談の後、記念品交換を行いました。

津市庁訪問では、前葉泰幸市長、中野秀代教育長の出席を受けました。前葉市長からは、江蘇省の鎮江市と姉妹都市として交流を持っているが、今回の交流はまた新しい中国との交流の一ページになるとの挨拶があり、唐団長から、基金が子どもたちへの支援、教師への支援、体育・文化の支援を行っていることに触れ、今回の津市立誠之小学校での教育交流が大きな成果の一つになると、津市への感謝のあいさつがありました。続いて中野教育長から、市教育委員会の役割や教育への財政支援などについて、説明を受けました。その後、歓談、記念品の交換を行いました。



前葉市長（左から2人目）と懇談

（２）歓迎レセプション

6日夕から、津市のホテルプラザ洞津において、第3次宋慶齡基金会教育代表団歓迎のレセプションを開催しました。三重県 植田副知事、山口教育長、津市 前葉市長の来賓をはじめ、津市立誠之小学校、馬場明生校長ほか4名の先生方、三重県はじめ各都県の教職員21名の参加者で、代表団の訪日を歓迎し、交流を行いました。代表団から横笛の演奏や歌唱の披露もあり、大いに盛りあがったレセプションとなりました。また、今年8月に易県を訪問したメンバーが再会を喜び合うなど、交流の絆を深めることができました。



歓迎レセプション 代表団の紹介

（３）津市立誠之小学校での授業参観・交流

代表団は、７日朝から三重県津市立誠之小学校を訪問し、音楽授業の参観、子どもたちとの交流、教職員との意見交換などを行いました。

はじめに橋本直子教諭指導の５年生の音楽の授業を参観しました。授業では、ひとつのグループの「ジャマイカルンバ」の演奏を聴き、演奏の思いや意図、表現の工夫について話し合った後、それぞれのグループが、表現の工夫をして演奏を発表し合いました。子どもたちから、演奏の思いや意図が伝わる工夫として、速さに変化をつける、楽器の特徴を活かすなど、具体的な方法を引き出す指導がなされ、それぞれのグループが、話し合いの内容を意識したすばらしい演奏を発表していました。

代表団も、子どもたちがそれぞれの練習の中で、良い点を確認めながら練習し、演奏を仕上げていく様子に、とても感心されていました。



音楽授業



琴の演奏・歌の発表

音楽授業のあと、代表団と５年生の子どもたちと交流会が行われました。子どもたちからは、中国語を交えたあいさつのあと、ミニコンサートの発表があり、「さくらさくら」の琴の合奏や合唱が贈られました。また、中国の歌「茉莉花」も中国語で合唱し、代表団もいっしょに歌っていただきました。子どもたちの演奏と歌声にたいへん感激されていました。

続く交流では、子どもたちから、中国の学校の様子、子どもの遊び、日本の印象などについて質問があり、代表団からはひとつひとつ丁寧なお話をしていただきました。伝統工芸品や楽器についての質問では、易県 の硯やひょうたん笛の実物を見せていただき、子どもたちは直接触れたり音を出したりしていました。また、易県 の先生から笛の演奏を聞かせていただきました。子どもたちは、先生方の話を熱心に聞き、ノートに書き留めていました。その後、10グループに分かれ、学校給食をいただきました。

易県 の先生は、ぜひ学校間、子ども間での交流も実現できるといいなと話されていました。

（４）意見交換会

午後は、代表団と誠之小学校の校長、教職員、各都県から参加の教職員と意見交換会を行いました。

代表団からは、研修や授業参観への感謝の言葉と共に、小学校でどのような楽器を経験するのか、必修の楽器は、どのように自分の演奏する楽器を選ばせるのか、など、合奏指導に関する質問が多く出されました。また、「子どもたちが意見を出し合い協力している様子に感心した。」「鑑賞能力も高まると思う。」などの感想も出されました。

出席された日本各都県の先生方からも、代表団の先生方に中国の学校での授業の様子を尋ねるなど、熱心な交流が行われました。

ご準備いただいた三重県教職員組合、誠之小学校の皆様はじめ、関係の皆様にあたためて感謝申し上げます。

(5) 訪日団の感想

訪日教育視察交流から得たこと

河北省易県实验中学 史建奇

1. 訪問視察について

- (1) 人々は親切で、綿密で徹底しており、礼儀正しく、友好的でした。学校では、打ち解けた雰囲気の中、仲良くしたいという気持ちと熱意が伝わってきました。団のメンバー一人ひとりにも折り紙の小さな鶴をはめ込んだカードが渡されました。子どもたちのきめ細かい心配りや誠意を感じることができ、友好と平和を望む強い思いが伝わってきました。
- (2) 清潔で静か、モラルがあり秩序だっていました。街ではどの施設も非常に清潔で、衛生上の死角はなく、街中は極めて静かで秩序だっており、ルールを守り、他人を尊重する日本の優れた国民性が十分に現れていました。
- (3) 身体を鍛えることに力を入れ、理に適った食生活を送っています。学校給食では塩分や油分の摂取量は少なく、毎食手の込んだ料理を食べています。献立は理に適っており、栄養バランスがとれていますので、とても健康的な食生活を送っています。
- (4) 節約と省エネ、持続可能な発展。小学生も皆、一つのランドセルを6年間使い続けるそうですが、ここからも日本人の省エネ・節約意識をうかがうことができました。
- (5) 教育に力を入れ、バランスのとれた発展を図っています。日本の基礎教育は国と社会全体から大変重視されています。校舍建設の標準化が実現しており、目立った格差がありません。

2. 学校訪問時の交流について

- (1) 校内の環境は簡素で落ち着いており、人間本位が貫かれていました。人目を引くような大きな文字で記された標語は掲げられていません。掲示物を通して、児童の成長を中心に据え、個性の伸長を重視するという教育理念が伝わってきました。
- (2) グループでの協力を学ばせ、児童の主体性を発揮させています。音楽の授業では、先生の指導の下、すべてのプロセスで教師・児童間のやり取りがあり、グループ間でも相互のやり取りがあり、生き生きとした、熱心な雰囲気の授業となっていました。プロセスは楽しく、学習に取り組む子どもたちの姿勢は積極的で、高揚感がありました。
- (3) 各活動は秩序正しく行われており、子どもたちは主体的に取り組んでいました。中国語で歌ってくれた『茉莉花』では代表団の共感を引き出しました。子どもたちが主体的に取り組んでおり、その中で自己を表現し、自らを鍛錬していること、そして主体的な成長という目的を果たしていることを物語っていると感じました。

3. 考えたこと

- (1) 児童・生徒に対するモラル・習慣教育を更に強化する。
- (2) カリキュラム改革を更に深化させる。
- (3) 学校活動の系統化と常態化を更に進める。
- (4) 児童・生徒による自主的な運営を更に進める。

視察と交流は時間的には短いものでしたが、視察団の全員が、充実した忘れがたい時間を過ごすことができました。日本の皆様の誠意あるご対応と友情を中国の仲間たちに伝えると同時に、日本の教育における先進的理念と経験を十分に参考にし、かつそれを吸収して、易県の教育の改革と発展の促進のため積極的に貢献していきたいと思います。ここに心から感謝の意を表します！

中日友好宋慶齡基金会 唐九紅部長の引率の下、私たち一行10名は、2013年11月5日から11月10日の期間日本を訪問し、交流と視察を行いました。日本で行った訪問・視察・交流及び調査を通じ、私たちが感じたのは、次の五つの点です。

一点目として、経済力の面で中日間には非常に大きな隔たりがあるということです。

二点目は、近代化において、日本がフロントランナーの地位にあるという点です。訪日期間中最も直観的に感じたのは、日本ではインフラ施設が整備されており、中でも立体的な総合交通体系が発達しているということです。どの交通機関もスムーズな運行がなされており、京都のような国際的大都市でも車の長時間の渋滞はまず見られませんでした。

三点目は、日本は生態・環境保護の分野で顕著な成果をあげているという点です。日本を訪問して、“きれい”とは何か、“清潔”とは何かを真の意味で感じることができました。都市部であれ農村部であれ、真っ先に感じることは、何をさておきその“清潔さ”であり、これはおそらく、日本を訪れた我々中国人が強烈に受ける印象なのではないでしょうか。

四点目は、日本が世界で最も調和がとれ、秩序だった国の一つであるという点です。人々が日本の社会に対して先ず感じるのは、“秩序がある”ということです。交通や人の流れはあたかも“見えざる指揮者”の指示に従っているようであり、一見しただけで、日本はルールを守る社会であることが分かりました。

五点目は、日本が高い国民的資質を備えているという点です。日本国民の資質の高さは誰もが認めることです。これは先ず、日本の教育レベルの高さと深く関係していると思います。高校を卒業した生徒の大多数が大学に進学することができるため、大学教育を受けた人の割合が総人口の約半分を占めています。

日本人から受けた印象の中で特に顕著に感じられた点は、次の数点です。

- ① 礼儀正しい。人との接し方が極めて礼儀正しく、訪問時はアポイント時間を厳守します。日本人の“おじぎ”は世界でも広く知られていますが、ショッピングセンター・ホテル・レストランでは、お客様に対し従業員が必ず“おじぎ”をしながらお礼を言う姿が見られました。日本では無礼な振る舞いや無作法な行為・言動はまず見ることはありません。
- ② 信用を重んじる。日本人は誠実で約束を守り、商取引において詐欺行為が起こることはまずあり得ませんので、人を陥れる・欺く・騙す・持ち逃げするといったことはめったに起こりません。日本の企業は、信用を重んじることや製品の品質の高さでも世に知られています。
- ③ 自らを厳しく律する。日本人の口癖は“人に迷惑をかけない”であり、各人は自らがすべきことをきちんと行い、完璧であることを目指して力を尽くします。日本では街頭で見かける軽自動車ですら例外なくさっぱりと洗車されており、どの家屋や商店の前もきれいに整理整頓されていますが、これも“人に迷惑をかけない”ことの一つの現れではないかと思えます。
- ④ 団結心。日本で受ける感覚は、日本が強いまとまりのある（＝価値観を一つにする）社会であるということです。他の国にあるような民族間・人種間・言語間・文化間の隔たりがまったくなく、これらに起因する社会的軋轢は起こりようがないのです。日本人にはある種のチームスピリットが備わっており、誰もが集団の一員としての振る舞いに徹し、集団や社会の利益のために甘んじて個人の利益を投げ打っています。また日本民族には一貫して強い危機感があり、非凡な適応能力と不撓不屈のファイティングスピリットがありますが、これらはいずれも、日本が卓越した成果をあげる上で重要な役割を果たしています。

総じて言えば、今回の訪日は得るところが非常に多く、今後もより掘り下げた検討を続け、今回の訪日で得た各分野の収穫を取りまとめて、私自身の仕事で役立てていきたいと思えます。

私たち一行計10名は、日本滞在期間、三重県の関係各位から友情あふれる歓待を受けました。今回の訪問では多くの収穫がありました。

訪問期間中、私たちは、誠之小学校を参観しました。三重県のごく普通の小学校ですが、私は、訪問時にこの小学校の特徴を感じ取りました。馬場校長が最も誇りに感じているのは、教師たちが熱心に教育事業に取り組んでおり、障がい児を含むすべての児童たちに分け隔てなく接し、差別することなく、嘲笑することなく、見放すことなく、あきらめることなく、児童一人ひとりに真剣に向き合っているという点です。家庭に困難な事情を抱えている児童に対しては、考えられるあらゆる方策を講じ、安心して勉強ができるよう心をくんでいます。私はこの点に深く感動し、敬服しました。

橋本先生による5年生の音楽の授業を参観し、日本の小学生の無邪気さや活発さ、チームワークの精神と協調性を感じ取りました。この授業は楽器演奏の実践授業で、一つのグループに模範演奏をさせた後、他の児童たちに、足りない点や改善すべき点について分析させました。先を争うように発言し、積極的に討論を行っていた子どもたちの様子から、学習に対する彼らの前向きな姿勢や熱心が伝わってきました。その後、橋本先生は、子どもたちの意見をリズム・旋律・速度・強弱などのいくつかの分野に分けて一つずつ黒板に書き入れていましたが、そうすることで、子どもたちから出された一見まとまりのない意見が理論だった明晰なものに整理されました。模範演奏をしたグループは皆から出されたアドバイスに従って改めて演奏し、他の3グループもそれぞれ練習をしました。どのグループも息の合った演奏ができており、期待された学習効果に達していました。この授業はとても成功した音楽の授業になったと思いました。音楽科は比較的指導がしにくい科目で、クラス全体の秩序ばかりを強調すると、子どもたちから活気が失われ、主観的能動性や創造性を発揮するのにマイナスとなり、秩序を強調しなければ、子どもたちが各々楽器を手に行っていることが災いして授業は瞬く間に混乱し、教室全体が収拾のつかない状態になる可能性があります。しかし橋本先生はクラス全体をしっかりとまとめ上げており、子どもたちも、秩序正しい中にもそれぞれが主観的能動性を発揮させており、授業全体は整然と進行しました。橋本先生は授業中あまり多弁ではなく、むしろ児童たちから出された問題点や改善意見に多く耳を傾けておられました。この点は大変素晴らしいと感じました。なぜならば、教師は、教育の実施者であるのであって、子どもたちに知識を植えつける役割を担っているわけではなく、子どもたちと共に学び、互いに討論することで、彼らを教育の真の主体者にする立場にあるからです。ですので、この音楽の授業を見学できたことは非常に貴重な経験であり、学ぶところの多いものとなりました。

音楽の授業の後、私たち一行は体育館に移動しました。子どもたちは私たちのために日本の伝統楽器で、日本の歌曲『さくらさくら』を演奏してくださいました。中でも貴重な経験だと感じたのは、これらに加え、中国で最も有名なフォークソングの『茉莉花』を中国語でいっしょに歌ったことでした。異国の地で、このなじみ深く感動的な旋律を耳にできたことにとりわけ親しみを感じ、同時に、私たちを迎えるために誠之小学校の先生方や子どもたちがしてくださった、きめの細かい真心のこもったご準備に深く感動しました。

昼には、当校の子どもたちと昼食を共にしました。同じテーブルに着いた子どもたちは時々私に質問を投げかけてきました。日本は何といても一衣帯水の隣国であり、中国文化の影響を色濃く受けているので、漢字を書いて意思疎通を図り、私たちも子どもたちもおおむね理解し合うことができました。子どもたちは無邪気かつ素直で、客である私たちを熱心にもてなしてくれました。子どもたちのあの誠実で真心のこもった表情は今でもありありと記憶に残っています。

私は今後、これらを自分自身の経験として蓄積し、日本の長所を取り入れ、自らの短所を補うことで、先進的な日本の取り組みを私自身の教育活動の中にしっかりと反映させていきたいと思います。

日本滞在期間には、三重県庁・津市役所・三重県誠之小学校及び京都の歴史的建造物・人文地理などを中心に見学を行い、私は多くの収穫を得ました。

11月6日の午前、津市役所を表敬訪問し、市長及び教育委員会教育長の温かい応対を受けました。日本側の市長及び教育委員長と中国側の王東風副県長及び許俊良局長は、教育分野への財政投入・教育政策・学校マネジメントにおける両国の違いにつき踏み込んだ懇談を行いました。午後には三重県庁を表敬訪問しましたが、県庁建物の前に中国の五星紅旗が掲揚され、県庁の職員が正面入り口に整列し、私たちの訪問を大歓迎してくださっているのを見て、一行はアッと驚かされてしまいました。知事と県教育委員会委員長に熱心にご対応いただき、双方は、三重県と中国のそれぞれの教育スタイルにつき、ざっくばらんで楽しい意見交換の時間をもちました。

11月7日、三重県の誠之小学校を訪問しました。私たちは先ず、橋本先生による5年生の音楽の授業を参観しました。授業では、子どもたちは思い思いの方法で好みの楽器をのびのびと活発に演奏しており、授業はリラックスした気取らぬ雰囲気の中で和やかに進行しました。子どもたちからは堅苦しい様子がまったく感じられませんでした。その後学校の体育館に移動し、私たちを歓迎するために5年生の子どもたちが心を込めて準備してくれたプログラムを見せてもらいました。子どもたちが中国語で『茉莉花』を合唱した場面では、代表団も声を合わせて歌ったことで、私たちと日本の子どもたちの心が一つにつながることができました。

続いて、日本の子どもたちと親しく交流する会が催され、子どもたちから出された質問に私たちも丁寧に回答し、プレゼント交換をしました。また、子どもたちと昼食をいっしょに食べた際には、言葉は通じませんでしたが、簡単な英語の単語と身振り手振りで完璧な意思疎通を図ることができ、そのおかげで、この昼食会は、親しみにあふれ、和気あいあいとした最高のホームパーティーになりました！思ってもみないことでした。

昼食後、教育代表団は、三重県教育委員会の役員の方々及び誠之小学校の全先生方と、中日両国の音楽教育の現状と違いにつき意見交換を行いました。その中で、王東風副県長が高い専門的見地から橋本先生の音楽の授業についてコメントし、参加者全員から拍手喝采が起こりました。

日本の教育についての印象は、(1)教育分野に大規模な財政投入を行っていること。(2)学業に専念できる落ち着いた学校の佇まい。一クラス当たりの児童・生徒数など、規模を抑えることで効率的な学校運営を維持しています。(3)校内で行われる洗練された文化活動。子どもたちがとても活発で、一人ひとりにいろいろな能力が備っていると感じました。次に、誠之小学校の子どもたちが見せてくれたプログラムには、全国で1位をとってもおかしくないような琴の演奏もあれば、男子・女子児童による心打たれる合唱もあり、更には心を揺さぶられるような中国語による歌の披露もあったことから、活動の質の高さが感じられました。(4)日本の学校のカリキュラム設定では、更に、児童・生徒の身体能力の養成も重視していること。

私たちは日本の先進性を目の当たりにしましたが、それから何を学び取り、応用していくかは、教育視察団自身が考えるべき課題です。私は小学校に勤める一教育従事者として、学校教育は以下数点の改革を行うべきだと考えます。

第一点目として、子どもたちに対する基本的なモラル教育にもっと力を入れるべきです。基本的モラルを養成できれば、それは、良好な学習態度・校風や和気あいあいとした学校作りのベースとなるはずです。

二点目は、子どもたちに対する基本的な道徳教育にもっと力を入れるべきです。私は、日本が子どもに対する基本的道徳の教育に非常に力を入れており、しかもそれが幼いころから始められていること、そして、小学生から、高齢でなお仕事を続けている方からも、そして都会で働く若い人たちからも、勉強や仕事に熱心に打ち込み、友達や同僚たちと学び合い、向上心をもち、環境保護に取り組むという優れた資質を感じ取ることができました。

三点目は、子どもたちに対するいわゆる“人文資質教育（全人格教育）”にもっと力を入れるべきです。時代性を備え中国の国情に適った全人格教育を行うことは、児童・生徒の人格形成にとって必ずプラスとなり、児童・生徒の将来の成長に強い精神的原動力と情緒的サポートを与え、優れた全人格性と健全かつ崇高な人格をもった、各資質が身に備わったイノベーション型の人材を育てると思います。

四点目は、音楽教育の分野では、子どもたちの個性の伸展を奨励しつつ、音楽教育がもつ強みを使いながら、

さまざまな面における子どもたちの優れた品性・徳性をしっかり育んでいくことに一層力を入れていくべきです。私は個人的に、学校の器楽クラブの規模の拡大を申請しようと考えています。どの子どもも自分の好きな楽器が演奏できるようになるよう指導し、子どもたちの文化的素養を豊かにし、芸術的教養を高めていきたいと思っています。

今回の学習視察活動の実施に当たり、宋慶齡基金会及び易県教育局から賜ったご配慮とご支援に感謝いたします。学習と視察を通じ、私たちは見聞を広げ、心を揺さぶられました。私たちと日本の友人たちとの友好交流が今後も継続していくことを強く願っています！

訪日教育視察報告

龍華中心小学校 丁曉明

今回の訪日の主な目的は、日本の教育の状況について視察することでした。活動を通じて私が目にした状況をまとめると、次の数点になります。

1. 教育に対する行政機関の配慮。

教育に対し、日本の行政機関は極めて高い配慮をしており、地方自治体との協力の下で進められる国の教育制度は非常にうまく実施されています。行政機関は、教育関連法規・政策・財政投入・措置・教師の育成計画のいずれもを非常に重視しています。

2. 人間本位の学校マネジメント。

私たちが視察したのは郊外にある小学校でした。そこで目にしたのは、個性際立つ子どもたちの姿でした。昼になり子どもたちと昼食を共にした際は、皆とても話し好きな様子でした。言葉を使った意思疎通はうまくできませんでしたが、子どもたちは、言わんとすることを身振り手振りで伝えようとしていました。好きなことは何かという話題では、列車に興味がある子もいれば、鉄道に興味があるという子、蛇が好きな子や、中には幽霊に興味があるという子までいて、彼らに実にさまざまな興味の対象があることを面白く感じました。私は、これは、学校にゆとりのあるオープンな環境があり、学校が児童の個性を伸ばす教育に力を入れ、奇抜で風変りな興味や趣味も無下には否定しないからではないかと感じました。さまざまな場面で、司会者役の子が皆の前に出て司会進行をしており、しかもその役割を子どもたちが交代で務めていたのですが、子どもによって司会者ぶりが異なり、言葉がうまく出てこない子や恥ずかしがってしまう子もいました。そういった様子から、私は、この日司会者役になったのは、決して、私たちの視察受け入れのために選りすぐられた子たちではないと感じました。昼食後、隣に座っていた男子児童から私の名前の中国語の発音を尋ねられました。最後にお別れする段になって、その児童がややぎこちない中国語で「丁先生、再見」と言ってくれたことには、思いがけなかっただけに、とても感激しました。

3. 橋本先生による音楽の授業。

この学校の一クラス当たりの児童数は約30名で、大人数クラスではありません。今回の音楽の授業は、子どもたちにグループ合奏をさせることで楽曲『ジャマイカ・ルンバ』の曲想を感じ取らせ、各楽器の演奏の仕方をどのように工夫すればこの楽曲の曲想をよりしっかりと表現できるかを分析させるというものでした。私は初め、この目標設定は高すぎるのではないかと感じました。中国では、このレベルは少なくとも中学三年生から高校生向けのカリキュラムの目標とされているからです。ところが授業が始まると、私のこの考えが取り越し苦労であったことが分かりました。私が目にしたのは、生き生きとした楽しい授業であり、子どもたちは皆種類の楽器を演奏することができ、グループ合奏も息が合っていました。曲想を感じ取る場面では、子どもたちがそれぞれ自分の考えやアドバイスを発表したことで、演奏がそれぞれ変わり、子どもたちはさながら、一人ひとりが作曲家にでもなったかのように、自分たちの作品に聞き入っていました。

【参考になりたい日本の取り組み及び提案】

“学びて然る後に足らざるを知り、教えて然る後に困しむを知る”。私は、他の人があらゆる面で立派にやっているのを見ると、自分の及ばなさを知り、心配で居ても立ってもいられなくなります。今回の視察を通じて私た

ちは、多角的で開かれた教育を推進すること、行き届いた奥の深い教育のあり方について学ぶこと、ヒューマニズムの真の意味を探究し、調和のとれた子どもたちの成長に一貫して配慮することの大切さを強く感じ取りました。“中魂洋才（＝外国の文化を批判的に選別した上で、有益なものはすべて吸収し、中国に役立てる）”の上でポイントとなるのは創造性です。教育分野に関して、私たちが参考にし、学ぶに値するものばかりでした。一点目は、日本では、子ども一人ひとりの個性に合わせた指導が行われおり、子どものさまざまな能力を育成していました。このような教育方法は、私たちも検討する価値があると思いました。二点目に、子どもたちの在校中に、大変よく目配りがされており、真の人間本位教育が実践されていました。今回私たちは日本の先進性を目の当たりにしたわけですが、それからいかにして学び取り、応用していくかは我々教育視察団自身が考えるべき課題ですので、責任の重大さを痛感しています。卓越した成果をあげるには、努力と奮起あるのみだと思っています。

—————・—————・—————・—————

（代表団の易県の先生方5名から、日本の文化について、三重県や津市の教育について、音楽教育について、子どもたちの様子についてなど、様々な角度から丁寧な感想・ご意見を寄せていただきました。全文をご紹介します。字数の関係で、編集させていただきました。）

（6）第3次宋慶齡基金会教育交流代表団

団 長	唐 九 紅（女）	中国宋慶齡基金会基金部 部長
副団長	王 東 風（女）	河北省易県人民政府 副県長
	劉 穎（女）	中国宋慶齡基金会絡聯絡部国際処 副処長
	周 露（女）	中国宋慶齡基金会基金部 科員
	許 俊 良（男）	河北省易県教育局 局長
	史 建 奇（男）	河北省易県実験中学 教師
	邢 成 君（男）	河北省易県第一小学 教師
	于 軍（男）	河北省易県中学 教師
	史 翠 平（女）	河北省易県第四小学 教師
	丁 曉 明（男）	河北省易県大龍華中心小学 教師

（7）交流日程

5日夜	中部国際空港 着
6日	三重県／県庁訪問 津市／市庁訪問 歓迎レセプション（津市 プラザ洞津） 宋慶齡基金会と協会理事との懇談
7日	誠之小学校訪問 音楽授業参観 子どもたちとの交流会（総合学習） 学習発表（琴演奏 歌） 子どもたちからの質問に代表団が応答 子どもたちとプレゼント交換 学校給食交流会 意見交換会 校内参観
8日～9日	京都市内 視察 等
10日午後	関西国際空港 発

（吉田 記）

■2013 第5回易県音楽教師養成セミナー参加報告（教育交流・支援事業）

中国宋慶齡基金会との共同プロジェクト第5回易県音楽教師養成研修（音楽教師培訓）が、中国河北省易県で、8月19日から3日間にわたって行われました。5年目の節目を迎えたということで、当協会からは、黒田文男代表理事、吉田一徳業務執行理事のほか会員組織代表を合わせて8名の代表団が研修に参加しました。

研修は、河北省メディア学院から5名の講師を招き、小学校と中学校の2グループに分かれて行われました。今年度支援した電子キーボードも参加者各人に用意されていました。

また、代表団と参加教師の代表10名とで懇談会を行い、易県での音楽教育の現状、日本の音楽教育の状況、電子キーボードの活用などについて意見交換をしました。3日間の研修は、声楽の基礎、発声、キーボードによる即興演奏、授業への応用などの内容で行われ、約100名の教師が参加しました。

また、セミナー参加に合わせて、参加者との交流、小学校訪問、中国宋慶齡基金会訪問などを行いました。

（1）易県音楽教師養成セミナー

1. 開会式あいさつ

開会式でのあいさつの内容の一部を紹介します。

■易県人民政府 趙春生 県長あいさつから

長期にわたる当県の教育事業に多くの支持をいただいた中国宋慶齡基金会の指導者と日中国際教育交流協会の日本友人の方々に心から感謝いたします。

長年、わが県の教育事業の発展は、県全体教職員の弛まぬ努力結果であり、中国宋慶齡基金会及び日本の友人の支援のおかげでもあります。今まで、我が県に机椅子を1000セットあまり、電子キーボードを300台あまり援助していただき、4回の音楽教師研修が行なわれ、易県の教育事業に大きな貢献をしていただきました。

中日両国は一衣帯水の友好隣国であり、深い歴史と文化の絆と共同利益もあります。より多くの日本の友人が易県にお越しいただき、この美しい山川をみながら、易県の発展と県民の熱情を感じられるよう、心からお待ちしております。より一層、交流と協力を深め、中日両国国民の友情が永遠に続いていくよう祈っています。

今回の教師研修のために次の二つをみなさんにお願いします。

ひとつは、収穫。教師たちはこのめったにない研修機会を利用し熱心に勉強してください。講師の指導のもとで、よく勉強し、よく研究し、よく練習し、自分の専門素質を引き上げ、将来の仕事のために固い基礎を定めましょう。

二つめは、運用。研修で習った技術と先進的な理念を実践でよく運用し、勉強を楽しいものにし、教育方法を引き続き改良し、教育効率を高めてください。

生徒たちの生活に幸せが溢れ、生徒たちがすすくと成長できるよう頑張ってください。

■中国宋慶齡基金会 連絡部 陳愛民部長あいさつから

長期にわたる宋慶齡基金会に対する多くのご支援をいただいている社会各界の皆様心から感謝いたします。

周知のように、宋慶齡主席は生涯子どもたちを大事にして、子どもたちを世界の宝にたとえて、全社会に最も貴重なものを子どもたちに与えることを呼びかけました。宋慶齡基金会は宋慶齡主席の教えに基づき、我が国の青少年の発展に重点を置き、特に農村における基礎教育と教師素質の引き上げに力を入れるだけでなく、青少年の総合的な資質の養成と全面的な発展を促すことを重視しております。



教師は、貧困地区の音楽教育においてとても重要な役割を持っています。生徒たちがより専門的な音楽教育が受けられて、音楽への夢を持てるため、我々はこのような研修を通じて、易県の小中学校に、より多くの専門研修の機会を提供しています。今回の『易県音楽教師養成研修』の実施にあたって、易県人民政府、易県教育局のご支持をいただき、河北メディア学院、ご臨席の先生方のご協力をいただいたことに、私は宋慶齡基金を代表して心から感謝いたします。

最後に、中国宋慶齡基金、日中国際教育交流協会による第5期音楽教師養成研修が成功を収め、本日からの研修が皆様にとって実りあるものになることを願っております。

■日本中国国際交流協会 黒田文男 代表理事あいさつから

今年、易県音楽教師の皆様方との交流が節目となります第5回となりました。交流会は回数を重ねるごとに、内容は充実してきたと思います。その理由は、易県の音楽教師の皆様方の教育に対する熱意が今日をもたらしていることは当然であります。加えて、共同プロジェクトである宋慶齡基金の皆様方のご支援、そして、易県の教育界の発展を願われている河北省、保定市及び易県の教育関係者の幹部の方々のご支援によるものであり、敬意を表すものであります。

今回は、日本各地の教育関係者の代表者も同行しました。同行者は宋慶齡基金との共同プロジェクトの成果を実感するものと確信しています。

私たちが音楽教育の充実に取り組む理由は、音楽は歴史や文化の理解に欠かせず、また言語教育の推進という点からも基礎的な教科であることによるものです。

音楽教師養成セミナーを通じて、皆様方が音楽教育に一層励まれ、子どもたちの教育水準の向上、又未来の日中友好の一助になることを心から祈っております。

皆様のご健康と、子どもたちの輝かしい未来と発展を願ってご挨拶いたします。

2. 主な研修内容

目的と意義

音楽教師の授業レベルをアップさせ、地元の義務教育段階の教育レベルをアップさせる。

中日両国の教育交流を積極的に促進する。

内 容

1) 音楽基礎理論：基本理論、教学方法の活用、理論

2) 声楽教育

小学校教師向け「児童声楽はどのように訓練するか」講座

中学校教師向け「青春期学生の声楽をどのように訓練するか」講座

声楽訓練の問題点に答える

声楽合唱、重唱、独唱作品鑑賞；

声楽教学方法コースは生理常識や、喉保健や、声部練習、読みと発音、情感表現などの面から解説して、示範する。音楽教師に声楽芸術を理性的に理解してもらい、今後の教学と演唱にむけた基礎を作る。

3) 指揮方法と小中学校合唱曲目訓練

指揮動作のキーポイント、姿勢と手作法、声部合唱、輪唱、和声訓練；

クラスごとに、小中学生の合唱曲目を例として、実際のリハーサルで合唱の組織管理、声部分割、指揮方法、声部のハーモニーなど、各方面の能力をアップさせる。

4) 即席伴奏

キーボードによる、和声、伴奏設計、伴奏曲の編集等の訓練。即席伴奏は音楽教師にとっては不可欠な専門技術として、短い時間内で即席演奏の能力をアップさせる。

(2013年度第5期易県音楽教師研修会实施方案より抜粋)

3. 研修会参加教師代表との意見交換

主な発言内容を紹介します。

◇研修について

易県の教員からの意見・感想

- ・合唱の指導についても勉強したい。
- ・伴奏の勉強をしたい
- ・3日間は短いので、もっと機会を増やしてほしい。
- ・パソコンを使った音楽学習の研修をしたい。
- ・以前も参加し、伴奏の技術が上がった。
- ・地域の文化も学べるので、民族の特色ある音楽を勉強したい。
- ・合唱の指揮について、楽譜を読むための基礎から学習できるので、よかった。

代表団からの意見・感想（日本の各県の音楽研修の様子について）

- ・基礎的な部分の研修は足りない。
- ・音楽教員でも専門以外の仕事が多い。
- ・授業を見せ合う方法もある。
- ・指導方法だけでなく子どもたちの反応を細かく記録するようにしている。
- ・教員同士で議論する研修も行っている。



◇子どもたちの状況について

易県の教員からの意見・感想

- ・子どもたちは、流行している曲に興味を持つ。
- ・合唱について、どのように訓練したらよいのか。日本ではどうか。
- ・歌に感情が無いという問題がある。

代表団からの意見・感想

- ・和楽器を使った学習もしている。
- ・合唱は、クラスのまとまりをつくるのに有効だと思う。
- ・合唱コンクールにむけたとりくみの中で、曲を聴いて、ストーリーや絵をかかせるようにした。

（2）易県第一小学校、大龍華中心小学校訪問

代表団は、研修会場の易県第一小学校と、郊外にある大龍華中心小学校を訪問しました。

第一小学校は、授業に読書を多く取り入れ、課外学習では、書道や中国楽器の演奏に力を入れています。

校内のそれぞれの場所で、児童代表による施設や掲示物の紹介がありました。また、フルスという民族楽器でひょうたんのついた笛の演奏や、校庭で水を使って筆で地面に文字を書く地書を見せてもらいました。

大龍華中心小学校は、寄付で学校が造られました。通学に時間のかかる子どもたちは、寮生活をおくっています。学校では、伝統的な文化を継承するために、夏休みに子どもたちを集め、文化を伝える活動をしており、当日は、体操で表現した論語の朗読を披露してもらいました。



（３）中国宋慶齡基金会表敬訪問

20日に中国宋慶齡基金会を表敬訪問しました。初めに宋慶齡故居を訪問し、宋慶齡女史の像に献花を行いました。表敬訪問では、前、中日友好協会副会長であった井頓泉副主席に迎えていただきました。

井頓泉副主席からは、プロジェクトへの支援に対する感謝の言葉をいただき、黒田代表からは、11月に三重県で行う教育交流への代表団訪日の準備を進めていただいていることに感謝を述べました。



■中国宋慶齡基金会 井頓泉 副主席あいさつから

残暑の中、日本から易県に出かけて、先生方や地元への支援をしていただいて感謝の気持ちでいっぱいです。

長い間経済の発達していない所に、物資だけでなく、多方面の支援をしていただいております。

地元政府、先生方も感謝の気持ちでいます。きっと、易県の子どもたちは、小さい頃から親日の気持ちを持ち、中日友好の力になることでしょう。

今、中日関係が困難な時期だけに、私たちは子どもたちのために友好の種をまきたいと思います。中日は2000年以上友好の歴史があります。漢字など同じ文化の背景があるアジアの同胞として、建設的な友好関係を共同でつくっていききたいと思います。

日本の各都県でも中日友好がすすんでいます。友好を民間から政府へとつなげていききたいと思います。これからもよろしくお願いします。

■黒田文男 代表理事あいさつから

易県での研修は毎年成熟してきています。二日間、陳部長と周さんにたいへんお世話になりました。

教師を支援することが、最終的に子どもに還元されます。まず、教員が心も豊かにならなくてはなりません。そのためには教員の研修が必要だと思っています。

今回、全国各県から代表が同行しました。全員、プロジェクトに理解を示し、このような交流を続けていきたいと考えています。交流では、お互いに良い点や課題を伝えあっていくことが大切だと思います。11月に三重県での研修には、10名の方が来ていただけることになり、感謝しております。

古事記、日本書紀には、日本が東アジアの一員になるという目的があったとも聞いています。東アジアの友好は、我々民間のレベルでも必要ではないでしょうか。

平和友好を子どもたちに伝えていくのは教師です。これからも、教師への支援を、基金会を通じて進めていきたいと思っています。

代表団員の発言から

- ・交流でお互いに高めあうことが大切だと感じた。
- ・今回学んだことを、11月の交流で返せるようにしたい。
- ・中国の近代化が進む中で、易県の先生方が熱心に学ばれていることに感動した。自分自身の勉強にもなった。
- ・易県の先生方が、向上心をもって勉強しているのに感動した。子どもたちのためにさらにがんばり、日中友好に力を注ぎたい。

接待いただいた方々

中国宋慶齡基金会	井頓泉	副主席
連絡部	陳愛民	部長
基金部項目処	史金龍	処長
連絡部国際処	劉穎	副処長
基金部項目処	周露	官員

(4) 日本中国国際教育交流協会代表团 主な日程

8月17日(土) 代表团打合せ
8月18日(日) 北京着 河北省易県へ移動
8月19日(月) 午前 第5回易県音楽教師養成セミナー開会式
2教室に分かれて研修
午後 2教室に分かれて研修
セミナー参加教師代表と意見交流
易県第一小学校 大龍華中心小学校視察
夕食 教育交流
8月20日(火) (研修二日目)
北京へ移動
午後 宋慶齡基金会 表敬訪問 歓迎宴
8月21日(水) (研修三日目)
午後 北京発

【代表团メンバー】

団 長 黒田 文男 (協会 代表理事)
副団長 鈴木 伸昭 (協会 理事 静岡県教職員組合 執行委員長)
秘書長 吉田 一徳 (協会 業務執行理事)
伊藤 宏美 (協会 理事 教職員共済生活協同組合 専務理事)
田沢 憲 (協会 評議員 山梨県教職員組合 執行委員長)
鶴岡 克彦 (千葉県教職員組合 中央執行委員長)
土井 彰 (東京都公立学校教職員組合 執行委員長)
中村 武志 (三重県教職員組合 書記長)

(吉田 記)

■黒田代表理事らが中国を訪問 (教育交流・派遣事業)

各団体、困難な時期での訪問に歓迎の意

2013年2月25～27日、黒田文男代表理事、山中正和業務執行理事、吉田一徳業務執行理事、初岡昌一郎理事、北京滞在中の周牧之在北京駐在名誉代表の5名は、中国宋慶齡基金会(李寧秘書長)、中国教育国際交流協会(林佐平常務理事)、中国教育科学文化衛生体育工会(万明東主席)と会談し、今後の両者の関係の強化を確認するとともに、今後の事業についての建設的な意見を交換しました。

(会談内容については、資料【共生力18号】をご覧ください。) 54ページ参照

■第7期安東自由大学参加報告（教育交流・派遣事業）

（１）記録・報告

① 安東自由大学国際セミナーの概要 ～安東セッション～



報告者 左から白立文（中国）、初岡昌一郎（モデレーター）、重松清文（日本）、権英俊（韓国）の各氏

1. 開会式

■権重東安東自由大学名誉総長

参加者の方々には、アジアに関心を向け、特に韓国について心配していただいていることに感謝したい。今回のテーマは教育。教育の大切さが理解されていないことが多くある。基礎教育というのは、社会で一番大切に話されるべき問題である。教育問題は、教育で解決し、ひいてはさらに発展していくべきである。一生の教育過程の中で大切なのは、1～18歳までの教育である。このセミナーを通して多くの意見を聞かせていただきたい。

■初岡昌一郎安東自由大学運営委員長

安東自由大学ではすべての参加者が教師であり、生徒である。学び合いの姿勢が大切だ。国籍や言葉の壁を超え、お互いの経験と意見を率直に語り合い、謙虚に耳を傾け、共通の絆をより強くすることを願いたい。東アジアの国家間の関係は、対立と緊張は高まっているが、このような時期であるからこそ、国家間関係を越えたアジア市民社会の拡大がますます重要である。様々な個人や団体におけるアジアレベルでの交流による相互理解と協力が和解のための積極的インパクトになる。安東自由大学は、制度でも組織でもない。むしろ、この大学は理念であり、われわれを結びつける出会いの場である。対話と交流の場であり、私たちは国益という神話を超えて、将来の世代の友好と親善、アジアの人々の反映と平和を願ってお互いのコモンスペースを広げていきたい。

■白立文氏

安東自由大学という学校は、権さんと初岡さんが、東アジアにおいてわれわれの力で1つの学校をつくりましょうということで始まった。そこは限りないスペースを与えるもので、教室はなく、みんなが先生というものである。私は当時そのような初岡先生の言葉に深く感銘した。韓国・日本・中国の三カ国の文化は共通していてこの

3つの国は切っても切れない関係である。近代において3ヵ国はそれぞれの道を歩み、現在社会体制は違っている。しかし、国民の心や理念はどんどん近づいていると確信している。

■安東大学総長

安東自由大学は、教室、教授、学生はおらず、参加者が先生であり、学生であり、集まるところが教室だという理念のもと、7回目を迎えた。とても素晴らしい。参加者は、韓国の賢人の言葉「勉強は、死んでこそ終えるものなので、私は急ぐこと遅らせることもない。」「教えることを嫌がらず、学ぶことを怠らなかった。」を自ら実践にうつしている方々である。

2. 報告と討論「東アジアにおける義務教育の課題」

〈1〉重松清文氏（元校長）の報告「学力問題の背景にあるもの」

国際学力調査の結果と世界の動向について、一つは、学校効果を上げるためには、家庭・地域の教育力や教員の指導力を向上させることが重要であるととらえる傾向、もう一つは学校間競争原理を取り入れて、学校効果の向上を期待する、という大きく二つの傾向がある。

日本における学力実態調査からは「離婚率」「持ち家率」など、家族関係や地域のきずなが大きく関与していることが明らかにされた。さらに、障がいのある人をどのように理解し、支援しようとするかは教育の基本である「平等・人権尊重」の根本にかかわることである。

〈2〉白立文氏（中国）の報告

中国の教育は1980年代以降、義務教育に重点が置かれるようになった。しかし、財政力が小さく、小学校すべてにスクールバスを付けようとしてもお金が足りず、民間に出させているような状況である。2012年の調査では、中国の子どもは一人っ子政策の影響でますます減っていく傾向にある。それに応じて教職員の数も今後大きく減っていく。いい学校に入るために子どもたちが非常に疲れている（過労児）。また、農村部の学校には、大人が都市部に働きに出ており、子どもが家に一人でいるいわゆる「留守児童」が2200万人もおり、社会問題となっている。都会には重点学校があり、そこへ入学させるための競争が激しい。北京でのそういった学校の周りの家の値段はどんどん高騰していつている。

中国の親は、子どもをまずよいところへ就職させたいと考えており、生涯の貯蓄をかけて、有名大学への進学のためにお金を使っている。こういった実情をふまえ、中国では国民の資質教育が必要である。とりわけ小学校段階からの教育が大切である。

〈3〉権英俊氏（安東大学名誉教授）の報告

韓国では、親や目上の人を敬う「孝」の気持ちが大切であり、「孝教育」の実践が進められている。しかし、教育プログラムはあるものの、義務教育においては教育課程で学習されていないため、今後教育現場でしっかり学習されるべきだと考えている。ただ、「孝」という概念に重点を置きすぎると、親が間違ったことをしたときに子どもが指摘しないというような問題が起きてしまう可能性もある。こういった点については注意が必要である。

現代の科学がいくら発達しようとも、人間として基本的な徳をもっていなければならない。歴史上同じような道を歩んできた日中韓において、「孝」の教育が大切であることを、この安東自由大学を中心として継承しながら学習していきたい。習うことを嫌わずに、教えることを怠けずに。

〈4〉臥龍初等学校 元校長の発言

私は、学校以外の場所で「挨拶」の指導講師をしている。そこでは、韓国の伝統的な礼として挨拶とは何か、人間関係においてなぜ挨拶が大切なのか等について討論をしながら教えている。このプログラムでは、挨拶について実際に体験して感じさせ、挨拶に対する共感を得てそれを自分の態度として維持させることをめざしている。



他にも、「ソンビ」という清く正しい学問をする知識人の道徳や陶山書院の有名な先生について学ぶといったこともしている。講師は、元教育長、元校長など、ボランティアである。私たち指導講師は、学校では教えないもの、家庭では教えづらいものをピックアップして教えている。正規の教育課程ではないが、このようなとりくみは、社会教育として多くの地域や国で行っていく必要があるのではないかと考えている。教育には保護者、子ども、教員と3つの側面があるが、社会教育という側面も重要であると考えている。

〈5〉意見交換で出された意見



●日本参加者

2つのエピソードを紹介したい。1つめは、上海日本人学校の理事長をしているが、この学校の中国人事務員に、なぜ日本人学校の事務職員になったのかと聞くと、給料はそれほどよくないが、労働時間がしっかりしていると言う。それは何を意味しているのか。帰って子どもを指導するための勉強をするのである。その子どもは小中の優秀な私立の学校に通わせている。この事務員は、大学も出て、日本にも留学していて日本語が話せる方である。2つめは、東日本大震災において、多くの国の人が、文化や言語などのあらゆる

違いを越えて、あのときとった日本人の行動を称賛した。その頃、私はマレーシアへ行ったが、現地で多くの方が日本人学校へ入れて欲しいと希望してくるというできごとがあった。いわゆる日本的な教育は、国境を越えて素晴らしいものがあるのだと思った。

学力テストのデータについて日本で論議がなされている。しかし、今日のIT機器が発達した中で、基礎知識、基礎技術は家にいても習得できる。だとすると学校で集団の教育の必要性は何か。先の事例の中に、ヒントがあるのではないかと。日本人学校では、全員で掃除をして帰すという日本では当たり前のことをしている。これを見て外国の方は感心する。また、行き交う子どもたちがちゃんと挨拶をしている。日本ではそのようなことがだんだんなくなっている傾向もある。

●韓国参加者

私は今年8月末で高校の校長を退職した。若いころ、大学で学んだ教育学と現場での教育の差に悩んでいた。大学の教育学は理想を追求していたが、現場は現実を追求していた。管理職になって、現場での教育に安住するようになり、よい大学により多く入学させた学校がよい学校だと勘違いしていた。進学率に生き甲斐を感じながら、校長として努めたことを後悔している。

今から数年前、何が真の教育なのか、校長としてやるべきことは何かについて改めて考え、真の人間を育て上げることが大切だと考えるようになった。その後は人間が変化している過程をみながら、成長していることにやりがいを感じた。「今、生き残っている99匹の羊より、1匹の失った羊を大切にすることが必要がある」という聖書の言葉の意味がわかるようになった。もっと早くわかっていればと後悔している。

本日3人の方は、教育には王道がないということをお話されたのではないかと。特に白先生の中国の現状紹介には興味をもった。過去に産業化や民主化がすすむ中で生じた韓国の課題を今中国が抱えているのだと。教育なくしては成長なし、教育なくしては徳化の国になることもない。教育とは努力であり、教育とは成長させる原動力である。今の個人主義が蔓延している時代が過ぎ去ると次にどんな時代となるのか。この問題について日中韓の3カ国が深く議論していく必要がある。

3. まとめ

●発表者のまとめ

日本 重松：3カ国が、未来に向かって、共同の新しい人間的価値観をどうやってつくっていくのか。次の安東自由大学では、その実践を活用できるようがんばっていききたい。

中国 白：中国はこれから大きく教育改革がすすんでいく。今後、このような改革をすすめる上で知識人や教師を支えるものは何なのかを考えると、孔子の教えから学んでいくことが大事ではないかと。

●権名誉総長のまとめ

安東自由大学は必ず発展する。参加者とともにアジアの中心になることを確信する。

中でも外国人の待遇、基本権を守ることを訴えたい。差別なく教育を受けるという中でこそ安東自由大学も発展する。教育の基本的な価値である自由、人権を議論し、永遠な教育の価値を保つために来年も同じテーマにすることを提案する。

(松原、関口 記)

② 安東市臥龍初等学校訪問

9月4日（水）午前中、教育学部のメンバー中心に安東市臥龍初等学校を訪問させていただきました。安東市臥龍初等学校は自然豊かな農村地帯にある学校でした。そしてその学校（敷地内）は、周りの自然豊かな景色に対し人工的な印象を受けました。敷地内のグラウンドは人工芝が敷かれ、全天候型タータントラックとその外周にはインラインスケート用のトラック、校舎に入ると電子黒板やどの教室にもパソコンが完備されており、時代の最先端の教育環境を整えているようでした。

<元安東市教育長からの説明より>

安東臥龍初等学校は2009年に教育科学技術部指定され、農山漁村全員学校に指定されています。また、現在はスマート教育の研究校として5年間運営されています。そして、2016年には全国に先駆けてデジタル教科書が使用されることになっており、そのモデル校として選定されています。

学校長は公募制度で就任しています。

2011年には道指定でデジタル教科書適用政策研究学校に指定されました。また、地域の方々を集めて書道教室をしています。

大韓民国の教育の現状についてですが、現在の政府の基本的な考え方として、夢とやる気を育てることのできる学校教育の正常化、未来の人材を育成するための能力中心社会、規範の構築、教育機会の保障のための教育費の負担の軽減などを中心として、融合型で楽しむことのできる人材、想像力を発揮することのできる人材等を育てていく、それが新しい希望の新時代を切り開いていくことと考えています。

夢と希望を育て、実現化するためには、教育課程の運営や学区制のオーダーメイド型の進路設定、学校の会議活性化や学校で暴力があってはならないことから、危険がない環境の整備が必要と考えています。

新しい考えと誠の心を持った6つの観点から授業をおこなっています。

- ・正しい人格を育てていく
- ・基礎的な学習能力を確実にあげていく
- ・塾などの教育費の負担を軽減させていく
- ・暴力のない安全な教育環境を作っていく
- ・指導力のある教師を育てていく
- ・教育福祉を実現していく

安東では、安東の地域に見合った形での教育方針をたちあげています。

1つ目は、新しい考え方を育てようということですが、児童の基礎学力の向上、読書や行動能力の強化や英語能力の機会の活性化などがあげられます。

2つ目は、すばらしい心を育てようということですが、誠の心を育てるということで、学者精神を学ぶ、実践する安東人の育成などがあげられます。

3つ目は、幸福教育ということです。児童、保護者、教師、地域社会等が共感し教育活動を推進していく方針を示しています。



<臥龍初等学校長からの説明より>

本校は1933年に開校しました。

現在の在籍数は、小学生74人、幼稚園児19人となっています。家庭環境は、生活保護を受けている世帯が10%程度で、母子家庭、父子家庭が非常に多くなっています。

実際には、この周辺には3つの小学校がありましたが全て廃校となり現在残っているのはこの臥龍初等学校だけとなっています。

重視しているのは心の教育です。「毎日が新しい臥龍の子どもたち」ということで一日のテーマを持って日記をつけています。また、こちらには民俗資料館があるので、それを通じて先祖の暮らしを知るという取り組みもおこなっています。また、一人ひとりの児童に座右の銘を持たせる取り組みをすすめています。

学力の向上については、オーダーメイド型の学力向上のための心理テスト等もおこなっています。また、一番力を入れているのは子どもたちに読書の重要性を伝えていこうということで、毎朝20分間の読書の時間を設けています。

英語教育については、週3回ネイティブの方に来ていただき英語の授業をおこなっています。授業後にはネイティブの方と、動画を通してやり取りができるようなシステムをつくっています。放課後授業でもいろいろなプログラムをおこなっています。

また、この学校の卒業生が集まって奨学金制度を作っています。毎年、ここに入学してくる子どもたちに少額ではありますが奨学金を渡しています。

そして、地域の生涯学習として、書道教室をおこなっています。

<校内の見学>

校舎に入ると、玄関前廊下に小型の掛け軸がたくさん展示されています。その掛け軸には、子ども一人ひとりが決めた自分の座右の銘が校長先生による毛筆で書かれています。向かい側の壁には、子どもの行動や努力に対して渡される表彰状の掲示コーナーがあり、子どもの顔写真入りの表彰状が何十枚も掲示されていました。子どもたちの大きな励みとなるであろうこのような取り組みから、子ども一人ひとりを大切にしている学校の暖かい雰囲気を感じました。

学校には、パソコン室等の特別教室や全員が入れるランチルーム以外に、各教室のエアコン、全自動設備を備える放課後教室のためのゴルフ練習教室、図書や玩具を備えた学童保育室、別棟の民俗資料館、全天候型テニスコート等、日本の公立小学校では考えられない施設が多くあり、ハード面が充実していることに驚きを感じました。民俗資料館には、民族衣装や機織り機、農耕器具等、大小さまざまな現物資料が多く展示され、いつでも自由に昔の暮らしを見られるようになっています。民族を大事にしたい教育姿勢と祖先を敬う儒学の流れを感じました。また、敷地内には地域の人たちのための喫茶室や書道教室もあり、地域の人たちが自由に出入りできる「開かれた学校」でした。



<授業の参観>

6年1組の教室において社会科の授業を参観させていただきました。11人の児童机には各自のノートパソコンがあり、日本なら黒板が占める教室前面の中央には電子黒板（大型モニター）が埋め込まれていました。その隣の黒板にはチョークの置き場も粉受けもなく、電子黒板を中心として、ICTを随所に取り入れたスマート教育が日常的に展開されていました。

その日は、単元「1. わが国の民主主義」の授業で、本時の主題は「わが国の民主化過程の教訓と課題を調べる」ことでした。児童のノートパソコンには、デジタル教科書として、社会科の教科書の該当ページが表示されていました。

授業の導入では、民主主義に関する詩のアニメが電子黒板で提示され、視聴後、児童は次々と感想や疑問を出

しあいました。その後、黒板に単語の書かれた数枚のマグネットシートが貼られました。何人かの児童がそれを並べ替えると「わが国の民主化過程と、それが与える教訓と課題に対して考える」という文が完成し、それが本時の学習課題として提示されました。

次の学習活動はグループ討議でした。児童は3つのグループに分かれて机を寄せ、各グループで自国の民主化過程についての資料を調査し、報告書にまとめる活動でした。グループ内では、それぞれが意見を出し合い、それを一人が紙面にまとめていきます。教師は各グループを巡視して助言し、時にはグループの報告書等をタブレット型コンピュータで撮影して電子黒板で全体に投げかけました。一定の時間をおいて意見がまとまると、各グループの代表が順に発表しました。周りの児童は、電子黒板に映し出された各グループの報告書を見ながら、じつくりと発表を聞いていました。

その次の学習活動は、自国の民主化過程についての専門家とテレビ電話で討議するといった活動でした。ここでは、インターネット電話サービスのスカイプが利用されていました。その専門家に質問したい児童はその人が映っている教師のタブレットのカメラに向かって直接質問し、離れた場所にいる専門家がタブレットや電子黒板上で答えるという方法で、お互い顔を合わせての討議が繰り返されました。

そこで時間となって参観は終わりましたが、指導案では、次の活動としてデジタル教科書での調べ学習、最後には電子黒板上でのまとめ、自己評価、次時の予告等が計画されていました。

今回、スマート教育の先進的な授業を見せていただくことで、短時間ながらも多くの驚きと気づきを得ることができました。とくに、子どもたちの意識の流れも考慮した一連の学習活動のなかに、いろいろなICT機器をいかに有効に取り入れた授業を組み立てるかという視点で、学び、考えることができました。三重県的环境下ではハード面で大きく劣りますが、今後の教育活動にぜひ生かしていきたいと思いました。

(山崎、藪根 記)

③ 韓国精神文化の首都 ―安東市を訪問して―

片側4車線もある高速道路を、バスは一路安東市にむかって走る。日本じゃ考えられない道路の広さである。渋滞もなく、バスはスムーズに進行する。有事の際には高速道路が滑走路になるとの説明に少々驚きながら窓の外に目をむけると、数多くのクレーンが目に入る。建設中の高層住宅が建ち並び、さながら“建設ラッシュ”といった感じだ。韓国では6割が高層住宅在住とのこと。最上階の見晴らしを少々うらやましく思いながら「韓国精神文化の首都 安東」に向かった。

<ユネスコ文化遺産 重要民族文化財 河回村>

ソウルから3時間ほど走って、バスは高速を降りた。今度は山道を走る。道がどんどんと細くなる。窓ガラスに枝があたる。「大丈夫か?」と思っていると少々広い場所に出た。ここからは徒歩だと言う。200mほど坂道をすすむと、展望台にでも上がったかのようなすばらしい景色が目飛び込んできた。目下にはSの字のように川が流れ、その川に守られるように囲まれた、瓦屋根と茅葺き屋根の家々が建ち並ぶ集落が目に入った。

河回村である。



バスの中で、「河回村は、池に浮かぶ蓮の花のように見える」という説明を受けたが、まさにその通りだ。柳家を中心とした村で、現在は、人口約200人、住人の平均年齢は65歳、過疎化が進んでいるということだが、村の周りには水田が広がりすばらしい風景だ。2010年7月10日にユネスコ文化遺産に登録され、重要民族文化財としても登録されている。歴史的伝統を伝える家屋が多いということから、神奈川県鎌倉市と姉妹都市となっており、国際的な交流を深めているということである。

景観を損なうことを防ぐため、河回村にはバスで入ることができない。専用のシャトルバスに乗り換え村内に向う。村に入ると趣のある家屋が次々と目に入った。



「茅葺き」と思っていた屋根は、「藁葺き」だそうだ。「藁」のため、2～3年に一度は葺き替えなければならない。そのため藁は大変重要な物だという。見たところ20町歩（20ha）はあろうかという水田が広がっていたが、稲刈りはすべて手作業。コンバインで稲刈りを行うと、藁が細切れになってしまい使い物にならないそうだ。「米よりも藁の方が貴重である。」と笑いながら説明された。専業農家は3軒という話であったが、いったいどうやって稲刈りをしているのか。気の遠くなるような稲刈り作業である。

河回村の全体が記された大きな地図のある場所に移動し、村全体についての説明を受ける。日本では日当たりを考え南向きに家を建てるが、河回村では川が見えるように家を建てるそうだ。また、家の基礎をつくるのに、石は使わない。井戸も掘らないそうである。河回村は川に浮かんだ船のようにも見える。「石を使うと重くなり船（河回村）が沈んでしまう。井戸を掘れば穴が空いてしまい、やはり沈んでしまう。」という風水も絡んだ言い伝えにより、現在も土を基礎に使い家を建てている。井戸も掘らないそうだ。河回村を囲んでいる川には透き通ったきれいな水が流れている。川の水を生活や農業に使うことから、川の存在を重んじているのだろう。川に対する畏敬の念のようなものが感じられた。

高さが120cmほどの塀に挟まれた道を、村の奥に向かって歩みをすすめる。歩きながらガイドの方が、さまざまな説明をしてくれる。河回村にはエリザベス女王も来村されたそうだ。また、降旗康男監督、高倉健主演の日本映画「ホテル」の撮影場所にもなったそうである。韓流スターのリュ・シウォン（柳時元）の実家も河回村にあり、日本から多くのファンが訪れるそうだ。ガイドの方が「安東市在住であることを日本で話したら、リュ・シウォンのファンの方からやたらと写真を撮られた。」という話には思わず笑ってしまったが、世界的にも日本的にも、知る人ぞ知る由緒ある場所なのだと、説明を受けるたびに感じた。

樹齢600年という大きな榎（楠？）の木の前に来た。しめ縄が張ってあり村の守り主のような感じを受ける。しめ縄にはおみくじのような紙が幾つも結んであった。話を聞くと、観光に訪れた日本人が、願い事を書いた紙をしめ縄に結んだそうである。しめ縄に紙が結んであるのを見て、観光に訪れた韓国人も「願い事を紙に書いてしめ縄に結ぶと願い事がかなう。」と勘違いをし、現在に至ったそうだ。さながら、日本の神社のようであった。私も家族と自分の健康を祈願したが、「安産の神様」ということが後でわかった。「結婚相手は村の中から見つける。結婚する当日まで相手の顔を知らないということが、昔は当たり前だった。」という話を聞いた。そうした事情からも、「安産」を祈祷する場所が村には必要だったのかもしれない。

河回村を見学した後、村を取り囲むように流れている川に出た。河回村では、この川を「花川」と呼んでいるそうだ。対面の岸には高さが約100m、幅が約500mの屏風のような見事な断崖絶壁が広がっている。「先ほどはあの上にある芙蓉台というところから、河回村を見ました。」と話が合った。足下が見えなくてよかった。見晴らしはたいへんよかったのだが自分は高所恐怖症である。あの上にいるのかと思った瞬間、背中に冷たい汗がにじんだ。

それにしても、なんとすばらしい景観だろう。

歴史的な家屋、ゆったりと流れる河川、そして壮大な崖。それぞれがそれぞれを引き立て見事なロケーションである。川沿いは桜並木となっていて、春には「花見」が行われるそうである。きっと最高の花見であろう。

河回村の歴史ある家々には、現在も人々が住んでいる。農作業もあらかた手作業で行い、農薬も極力使わない。近代的な人工物



を目にすることもなく、バスの窓から見えた高層ビルなど一つもない。自然を活かしながら自然と共存し、自然を楽しむ術を知っている人々がここには住んでいる。タイムスリップしたような感覚を覚えると同時に、時間がゆっくり流れているように感じられた河回村は、心癒される場所であった。

＜河回別神クッ仮面舞＞

パンフレットをいただいた瞬間に思ったのは、「なぜ、“クッ”だけカタカナなのだろう？」ということであった。重要無形文化財に指定されている「河回別神クッ仮面舞」のパンフレットは、今回、安東市を案内してくれた崔さんが、仮面舞保存会で作成したパンフレットをご自分で訳して日本語版を作成したそうである。その際、「クッ」に当たる漢字がなかったので、そこだけカタカナにしたそうだ。

「河回別神クッ仮面舞」は、12世紀の半ばに始められ、実に800年もの間受け継がれてきたものである。この仮面舞は、豊作や村の安寧を祈願することを目的として行われたが、支配階層と被支配階層の不条理を風刺し、被支配階層の押さえられた感情を仮面舞として表現することで発散させるものへとになっていったとのことである。

人間文化財である李相浩さんが、河回別神クッ仮面舞の振り、登場人物について説明をしてくれた。韓国では13の団体が仮面劇として指定されており、文化交流をはかっているそうである。河回別神クッ仮面舞は、日本、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、中国、モンゴル、タイ、シンガポールなど、世界のさまざまな国々で公演を行った。「新羅で行われていた仮面劇が日本に伝わり、能となったのではないかな。能は台詞を言うことはないが、河回別神クッ仮面舞では台詞をしゃべる。能では大きな動きはないが、韓国の仮面劇では体を大きく動かす。肩を上下に動かすことが踊りの特徴である。」などの説明を受けた。

登場人物の紹介もあった。女性の登場は3名。新妻・遊女・老女である。それぞれ表情が違うのだが、大きな違いは口の開き方である。新妻の口は一文字であり開いていない。遊女は少し開いている。老女は大きく開いている。新妻はそんなにおしゃべりはできないので口が開いていない。遊女は「はい」か「いいえ」は言えるので、口が少し開いている。老女になると何を言ってよいので大きく口が開いているそうだ。なんとなく納得できる。

その他にも、体が不自由な人、使用人、屠殺人、学者などが登場する。それぞれ個性的な表情だ。口の開き方以外に、仮面にはもう一つの特徴がある。顔の右側のしわは5本なのに左側は6本と、韓国の仮面は左右非対称に作ってある。顔を傾け、仮面をいろいろな角度から見せることで、表情を表すのは日本も同じ方法であるが、仮面を左右非対称に作ることでより豊かな表情を表そうとしているようだ。



さて、一通りの説明の後で、踊りの実演である。というか教えていたきながら一緒に踊ることになった。踵から足を付き、リズムに合わせてまずは歩く。それができたら、今度は、歩きながら肩を上下に動かす。リズムにのり、肩の動きに合わせて手を波のように動かす。なかなかの運動量だ。次は老婆の踊り方。膝を外側に向けて中腰になって歩み出す。これはキツイ。それに合わせて手も動かす。さらにキツイ。しかし、指導している李さんは、全く平気な顔で踊っている。日頃の自分の運動不足を反省しつつ、韓国の伝統文化を体感できた体験であった。

(臼倉 記)

④ 東アジアにおける義務教育の課題

東京都公立小学校元校長 学校心理士 重松 清文

日本における義務教育の課題 ～学力問題の背景にあるもの～

I 報告の概要

私は、①国際学力実態調査の結果と世界の動向、②日本における学力実態調査から分かったこと、③障がい者への教育と就労支援、この三つの問題について報告をします。

この発表に用いる資料は、OECD生徒の学習到達度調査 PISA (Programme for International Student Assessment 2006) と国際数学・理科教育動向調査 TIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study 2011)、日本における全国学力調査都道府県別調査結果 (2012)、この三つの調査資料を使用します。

なお、この報告に当たり、以下の文献を参考文献として活用しました。特に、大阪大学の志水宏吉教授の学力実態分析の視点に学ぶことが多くありました。

- ・学力を育てる 志水宏吉 岩波新書 2005
- ・学力格差の社会背景とその検証 志水宏吉 部落解放 2010. 626号
- ・地域の教育力向上のための課題と方向性 明石要一 中央教育審議会資料 2013
- ・アメリカの教育がなぜ失敗したのか 初岡昌一郎 海外論調短評 70
- ・韓国の教育格差と教育政策～韓国の社会教育・生涯教育政策の歴史的展開と構造的特質
尹敬勲 大学教育出版 2010
- ・韓国の障害者雇用の現状と課題 嚴成昊 南商堯 Study of Current Rehabilitation 1991

以上の資料と参考文献をもとに、3つの問題について報告しますが、最初に取り上げる「国際学力実態調査の結果と世界の動向」では、この調査結果をこれからの教育政策にどのように生かしていくかについて、国際的に二つの流れがあることを考えておきたいと思います。

一つは、子どもたちの学力を向上させるためには、家庭や地域の教育格差を改善し、福祉的な教育の基盤形成と教育人材の育成と採用を充実させる動きです。韓国が、「平生教育法」(1999)で、グローバル社会への対応として、すべての国民に平等の教育機会を与え、必要な資格をいつでも取得できる教育福祉国家「Edutopia」(韓国の造語)の理念を打ち出したのは、この第一の方向にあります。

それに対して、もう一つの動きとして、学力調査の結果を地域や保護者に公表し、保護者に学校を選択させ、学校と学校を競争させることで、教育効果をあげようという動きもあります。イギリスのサッチャー政権が推進した政策ですが、ブレア政権で多少修正されたと言われていますが、日本においては、小泉政権の時に「規制緩和・市場原理」の導入によって、現在においても日本の教育に強い影響を残しています。

後者の政策の問題点については、次の「日本における学力実態調査から分かったこと」で、大阪大学教授の志水宏吉先生の考察を参考に考えてみたいと思います。

最後に、「障がい者への教育と就労支援」について報告をします。障がい者の人権と教育についての政策は、教育・福祉政策の在り方を考える上では避けて通ることのできない問題と考えるからです。

II 国際学力実態調査の結果と世界の動向

PISAの2006年調査の平均得点順位を見ると、「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」の三つの学力について、韓国は、それぞれ、1位、4位、11位にあります。PISA型学力の中心といわれる読解力において、1位にあるのは、思考力・判断力・表現力に優れた成果をあげていると考えられます。中国の香港は、3位、3位、2位にあります。日本は、15位、10位、6位にあります。日本の学力調査結果は、他の学力と比べ読解力が低い結果になっているのが問題と指摘されています。この結果から文科省は、思考力・判断力・表現力の育成を強調するようになり、後で述べる日本の学力調査において、スキルの問題と思考力・判断力・表現力を問う二つの傾向の問題に分けて出題することになりました。これが、A問題、B問題といわれる問題パターンです。前者の学力テスト内容をA型、後者をB型と呼んでいます。

しかし、教育専門家は、PISAの調査結果よりもTIMSS2011の結果を問題視しています。この調査には、算数・数学と理科について、「勉強が好きだ」という設問があります。日本の小学生の回答は、算数66%、理科83%、中学生は、数学39%、理科53%という結果でした。国際平均は、小学生81%、86%、中学生66%、76%ですから、学習に対する関心・意欲においては、すべて世界の平均以下で、特に、中学生の学習意欲の低下は看過できません。つまり、学力の向上を考えると、日本は子どもたちの「学習意欲の向上」の問題を避けて通るわけにはいかないということです。学習意欲は、教育心理学的にみれば、「自己肯定感」と関連があります。自己肯定感を育む環境は、子どもの「メタ認知」(自己のよさを理解し、改善、更新する自分の課題把握ができる)力の

育成を学校の学習場面だけではなく、子どもの生活するあらゆる場面で育てる支援的な環境を構成することが重要です。自分に注がれる肯定的で啓示的な眼差しは、学校だけではなく、家庭・地域の環境にも影響を受けます。極論をすれば、子どもが「人として」大切にされる環境があるかどうかにもかかわる問題といえます。このことは、次の報告で詳しく見てみましょう。

Ⅲ 日本における学力実態調査からわかったこと

文科省が2012年に実施した全国学力調査都道府県別調査結果を見ますと、国語・算数（中学は数学）・理科の平均得点の上位は、秋田県、福井県、石川県、富山県、青森県、東京都、香川県、茨城県、山形県、広島県、奈良県、岐阜県……と続きます。下位は、沖縄県、大阪府、北海道……です。この順位は、2013年に実施された結果でも「上位・下位県 固定化」（毎日新聞 2013.8.28）と分析されています。

上位の秋田県、福井県、石川県、富山県、青森県は、日本の東北地方あるいは日本海側に面しているという共通性があり、いわゆる都会ではありません。この結果について、大阪大学の志水宏吉教授は、二つの比率との相関をみつけ、考察しています。

志水教授が着目した一つは、日本の家族の「持家率」です。

持家率の上位順位は、秋田県、富山県、福井県、山形県、新潟県……となっています。

持家率と学力の相関は、統計的にも明らかです。どうか。それについて、志水教授は、持家があるということは、祖父母と二世帯が住んでいたり、隣近所のおつきあいも長く続いていたという地域ではないか。つまり、家族を中心に、地域の絆も強いところだと考察をしています。

私は、それに加えて、このように地域共同体が強いところは、今回の東北大震災後の相互の協力や励まし合いにみられたように、子どもたちの育ちに地域の人々の温もりのある眼差しが向けられ、「自己肯定感」が育ちやすい環境があるのではないかと考えます。子どもを評価する基準が、「勉強ができる子」「優秀な学校に進学した子」といった一面的な評価ではなく、「あかるい子だ」「あいさつをよくする子だ」「家の手伝いをよくしている子だ」「親孝行な子だ」「おおきくなったな」などと、子どもを見る眼差しが日常の生活感覚に支えられたものではないかと思います。子どもを地域社会の中で、さまざまな生活感覚で見てあげるということは、子どもの自己有用感、自己肯定感を育てる大切な社会のもつ力（社会の教育力）だと思います。

次に、志水教授は、「離婚率」との相関を指摘しています。

離婚率の上位は、沖縄、大阪、北海道、福岡、宮崎……です。学力下位県が、沖縄県、大阪府、北海道……であることと重ねると、離婚率も子どもの学力に影響をもたらしていることは確かです。

ここでは、離婚の是非を問題にしているわけではありません。離婚は、子どもたちを育てる家族関係の厚さ、薄さに関係があるというのが志水教授の指摘です。就学をした子どもにとって、家族関係の薄さは、子どもの人格形成に影響をもたらすことは避けられません。また、就学前の子どもにとっては、愛着関係の育ちにも影響が出てくるとも避けられません。そのような家族関係の薄さを補う地域の人間関係も希薄であれば、学力形成の基礎が不安定になることも当然と言わざるをえません。

このように学力実態調査を考察していくと、学力の向上の問題は、実に根っこの深い問題であることがわかります。

処方箋も示さず、学力調査の結果を地域や保護者に公表することの意味を再考すべきでしょう。また、そのことが学校と学校を競争に追い込むことは、地域の社会的な力をますます混乱に追い込み、学校と地域・保護者の信頼関係にも亀裂を生みだすこととなります。

【追記】韓国での安東自由大学国際セミナーで、上記の報告を行い、帰国をすると、2013年の学力実態調査において、静岡県が小学校「国語A」が、全国最下位であったということで、県知事が、全国平均正答率以上であった学校の校長名を公表したというニュースを耳にしました。行政と学校が連携して、学力向上に向けて、子どもの学力を支える学校・家庭・地域の教育力の向上に向け、結果の検証を行うのが教育的な学力調査の結果の捉え方でなければならないはずです。今回は、従来型の学力であるA問題が低位になったということなので、B問題の対策よりは、改善策は分かりやすいと考えられます。個別指導の充実と学習習慣にか

かわる問題が主要な原因とすれば、個別指導をしやすい学級編成や学校の指導方法の工夫、放課後や家庭における教育環境の問題など、検証の視点は明確ではないかと考えます。学力調査結果を、このような教育的な改善策の資料とみなさず、校長の管理責任を問題視して、地域・保護者に校長の管理責任を公表するという流れ、冒頭で述べた「第二の傾向」がまだ健在であるという事に、正直驚きを禁じ得ませんでした。

この県知事のとった行動については、静岡新聞（2013.9.25）が、「校長名の公表は、学校名の公表と「同様のこと」とした上で、上位・下位にかかわらず、各校の了解なしに、一方的に校長名を公表することは、実施要領を逸脱しているとの見解を示した」と、文科省初等中等局学力調査室の見解を報道していました。

文科省は、「第2期教育振興基本計画」（平成25年～29年度）において、「我が国を取り巻く危機的状況」の中で、「地域社会、家族の変容 地域社会等のつながりや支え合いによるセーフティネット機能の低下→個々人の孤立化、規範意識の低下」「格差の再生産、固定化 経済格差の進行→教育格差→教育格差の再生産・固定化（同一世代内、世代間）→一人一人の意欲減退、社会の不安定化を指摘し、「教育行政の4つの基本的方向性」の一つとして、「絆づくりと活力あるコミュニティの形成」を示しています。

日本の教育もグローバル化の進展の中で、地についた教育改革の方向性を考えざるをえない状況にあると考えます。TIMSS2011調査（前述）の結果のように、「数学が好きだ」という中学生が39%という状況を、校長や教師や子どものせいだけにして、問題が解決する時代ではないということははっきりしています。文科省も「個々人の孤立化」「一人一人の意欲減退」という危機的な状況の改革は、学校だけの問題ではなく、地域社会が人間的な絆を回復させるコミュニティの形成が重要であることを提言するに至りました。ただ、このコミュニティの形成は、新しい集団の文化的な価値観の形成と言う問題を抱えますので、地域の市民が主体となってネットワークをつくりあげていくという視点が重要だと、私は考えます。

IV 障がい者への教育と就労支援

国際的には、「障がい」の理解も1900年代後半以降、大きく変化しています。それまで、障がい者は、handicappedと呼ばれ、ハンディのある人だから援助してあげなければならない人という見方が主流でした。しかし、1992年にアメリカが、「全障害児教育法」を改正し、individuals with disabilityと障害者の言葉を改正し、最近はそのほとんどの英語圏で、person with disability という表現になってきています。Disability（社会参加するための能力に不十分なところがある＝重松意識）であるが、「personである」という共通認識をもとうという動きです。「助ける」のではなく、その人が社会参加できる教育・環境・福祉を整えていこうという方向に力点移動があります。

このような国際的な動きの中で、障がい者の社会参加の法的な改善も少しずつですが進んでいます。日本においては、「障害者雇用促進法」（2006年施行）で、民間56人以上の雇用者がいた場合、その内の1.8%は、障害者の雇用を法的に義務づけることになりました（法定雇用率）。そして、民主党政権の時に法定雇用率が、50人以上の雇用の場合、2.0%に改正されました（2013施行）。

隣国、韓国は「障害者雇用促進法」を1990年に制定し、民間法定雇用率2.5%を定めています。「障害者の雇用促進法および職業再活法」では、雇用促進の目標を5%としていくための制度改革を2013年から行うと示しています。

私が注目するのは、韓国が、1990年に制定した「障害者の雇用促進法」において、それまで用いられていた「障害者」を、「障害者」と名称も改訂したことです。この改訂の背景には、冒頭に述べた世界の変化の流れを汲み取ったものと考えられます。グローバル化されていく世界は、「障がい」の理解にも変化の流れがあります。

残念なのは、日本においては、戦前は「障害者」（社会に参加するには、差し障りのある人＝重松解釈）という漢字が用いられていたのに、戦後、碍が当用漢字にないという理由で、オンが同じという理由で、「害」が当てられたという事です。そして、現在に至るまで、法律においても改訂する動きがないということです。

教育は、未来の市民の資質を育成する事業です。

そうであるならば、世界の価値観の変化にも敏感であることが大切だと思います。

私は、教育福祉国家の理念のもとに、グローバル社会を生きる子どもたちの学力向上政策は、子どもたちの生活基盤、家族・地域コミュニティの形成、生涯学習社会をも視野にいれて取り組む必要があること。そして、最

後に、障がい者の社会参加に向けた教育、福祉環境の充実、とりわけ、グローバル化に伴う価値観の変化に敏感であること。そのことは、多文化共生の理念に通じる世界の流れであることを報告しました。

これで、私の報告を終わります。

⑤ 中国の義務教育

全国教科文衛体工会（教育工会）国際代表 白立文

◆概 観

新中国は誕生したその日から、民族の資質の向上、義務教育の普及及び非識字をなくすことを自らの責任と見なした。

しかし、十年間の“文化大革命”によって軌道に乗った中国の教育事業は停止させられた。“文化大革命”が終わり、改革開放が実施されてから、中国では教育事業が重点課題となった。中国政府は80年代には、全国で小学教育を普及させ、条件を備えた地域では初等中学教育を普及させると提示した。

1985年に政府は、改革開放後初めて全国教育活動会議を開催し、9年制義務教育を全国で普及させていくこととした。その後中国国家教育委員会が設置された。

1986年4月、第6期全国人民代表大会第4次会議で「中華人民共和国義務教育法」が採択され、9年制義務教育の実施が法制化されることになった。

90年代に入ってから、さらに9年制義務教育という戦略目標を策定し、1992年10月中国共産党の14回大会では“教育を優先的に発展させる戦略地位”に位置づけ、今世紀末に9年の義務教育を基本的に普及させ、中壮年の非識字をなくすことを目標とした。

1993年2月、国務院は「中国教育改革と発展の要綱」を発表した。即ち、県を全国総人口の85%の地域で9年制義務教育を普及させ、初等中学校の入学率を85%に上げ、学齢期児童の入学率を99%以上とした。

その後、国務院は一連の「義務教育法」を保障する政策と法律規定を定めた。

義務教育の目標を達成するため、中央、省、市、県で逐次に義務教育の専門補助金を設置した。第9次5ヵ年計画期間では、教育部、財政部が貧困地方義務教育プロジェクトを行なった。この中国史上類のないプロジェクトに、中央39億元、地方政府78億元、世界銀行の借款3億8,000万の合計100億元を超える資金を投入し、その上に地方政府の配合資金60億元を加える資金が保障された。

このような取り組みは中国国民からも協力を得た。非公式な統計によれば、80年代には、全国で1,071億元の民間資金が農村部の学校施設の改善に使われ、90年代には教育への義援金も1,394億元に達した。現在、第12次5ヵ年計画が実施されており、教育事業の改革は大きな進展を見せている。すなわち、9年義務教育が全面的実現され、高校入学率も大幅に上がり、職業教育も増強され、高等教育の大衆化が向上し、教育の公平性が大きく取り上げられ、改革は推進され、教育の構造もより整備され、学校の条件もかなり改善された。

◆義務教育

2011年の統計では：全国の小学校は22万8,600校である。（先年より学校数、新入学者、在校生、卒業生いずれも減少）男子の入学率は99.84%、女の子が99.86%である。

全国の小学校の教師は553万8,500万人である。（先年より減少）専任教師の学歴の合格率は99.81%（0.09ポイント向上）、小学校の生徒と教師の割合は17.36：1であり、昨年の17.71：1と同じ水準を維持している。

初等中学校は5万3,200校あり（49校の職業中学校を含む、先年より901校の減、新入生、在校生、卒業生は昨年より減少した。進学率は88.4となり、前年より1.11ポイント上がった。

全国の中学校の専任教師は393.91万人（昨年と同水準）、先生と学生の比率が14.38：1、先年の14.98：1に比べ少し下がった。

全国の普通の小学校の校舎建築面積は56,913万1,100㎡、中学校校舎面積が47,582万31㎡を有している。義務教育段階では学校に寄宿している生徒は3,276万5,100人、在校生の21.85%を占めている。その内小学校の寄宿生徒は1,080万7,800人（10.89%）を占めている。中学校の寄宿生徒は2,195万7,300万人（43.34%）を占めている。

全国義務教育段階では出稼ぎの労働者に同行している子どもは1,260万9,700人いる。内、小学校に通っているのが932万7,400人、中学校に通っているのは328万2,300人いる。

義務教育段階で在校生の中に農村部の留守児童は2,200万3,200人おり、小学校に通っているのは1,436万8,100人、中学校に通っているのは763万5,100人いる。

◆就学前の教育と特殊教育（註）

全国には幼稚園が16万6,800園（先年より1万6,300の増）。入園児は3,424万4,500人（先年より447万7,800人増）。幼稚園の教員は149万6,000人、一年間で19万700人増えた。

全国では特殊教育の学校は1,767校が有り、専任教師数は4万1,300人。在校生は39万8,700人。内訳：盲学校には5万2,300人；聾啞学校には10万7,700人、知的遅れや他の教育を受けている子は23万8,800人。全体として減少している。

◆高校段階の教育

全国の高校段階の教育（普通の高校、成人高校、中等職業学校を含む）の学校は2万6,868校（先年より770校が減少、新入生、在校生とも、先年より91.33万人減少）。高校の進学率も先年より1.0ポイント上がった。全国の普通の高校は13,509校、在校生は、先年より0.5%増えた。専任教師155.68万人、学歴の合格率は95.73%であり、学生との比率：15.77:1；学校の校舎面積は40827.29平米である。

全国の成人高校は857校あり、在校生は増加。

全国の中等職業学校は（普通の専門学校、職業高校、技術養成学校を含む）13,093校有しており、専任教師数は88.19万人、入学率が高校段階の進学率の48.89%を占め、在校生は2205.33万人に達している。

全国の普通中等専門学校は3,753校。在校生が855万2,100人。教職員数は43万5,000人である。

職業高校は4,802校あり、在校生は680万9,700人（先年より減少）、教職員数は40万6,700人に達している。

技術養成学校は2,924校あり、在校生は430万4,200人おり、年々増えていく趨勢を見せている。

成人中等専門学校が減少している。現在学校数は1,614校あり、先年より106校減少した。

◆大学教育

全国の各種類の高等教育の規模は大きい、在校生者数3,167万人に達し、進学率は26.9%である。普通の大学や成人高等学校数が2,762校に上り、先年よりは39校増えた。普通の大学：2,409校、成人大学353校、専門短期大学1,280校；全国には院生課程を教える単位は755校ある。

全国で新規入学の院生の人数は56万200人、その内博士6万5,600人、修士49万4,600人。

普通の大学の学部では新規入学者は681万5,000人（先年より19.75万人増加、2.98%増）。在校生総数は2,308.51万人となり、卒業生も608.16万人に上り、就職は深刻である。

大学の教職員は220万4,800人おり、専任教員は139万2,700人である。

◆民営（私立）の教育

近年、中国では民営教育が注目されるようになった。現在各種類の教育機構は13万800校にのぼり、在校生総数も3,713万9,000人に達している。幼稚園：11万5,404校、園児1,694万2,100人；小学校：5,186ヵ所、在校生567万8,300人。4,282校、在校生442万5,600人；高校：2,394校、在校生：234万9,800人；中等職業学校：2,856校、在校生269万2,500人；大学：698校、在校生505万人（学部生：311万8,200人、専門学193万2,500人）その他の民営訓練養成機構は2万1,403校が設置され、955万4,600人が訓練を受けた。

◆今後の重点課題

義務教育の普及の基礎が弱く、相当の学校の運営の条件はまだ国家の基準に達していない。また、地域や都会部と農村部の格差及び学校間の均衡が取れておらず、教育の質も大きい差がある。

こうした問題が各クラスの政府と関係部門が継続的に義務教育の均衡の発展を推進させ、地域の格差、都市と農村の格差、学校間の格差を縮小させ、義務教育の均衡的発展の体制を確立し、義務教育の公平をとり図らなければならない。

1. 国家の投入は中西部の義務教育に重点化すること。国家が行っている学校校舎の安全プロジェクト、貧弱学校の改造プロジェクト、中小学校の現代通信教育の項目を中西部に重点をおく。

2. 都市部に出稼ぎに来る農民に同行した子どもに義務教育を受けるように保障させること。2011年の統計では約1,167万人の同行している子どもがおり、全国の義務教育の子どもの総数の7.7%を占めており、各地は出稼ぎに同行している子どもが平等に義務教育を受けられることを地域の発展計画や財政経費保障の枠内に組み込まなくてはならない。同行の子どもの実際人数に応じて教育経費を給付し、国立学校の資源を生かし、又は政府が購入する形で彼らの教育を無料で受けるよう保障しなければならない。
3. 中西部地域に合格した教師を養成する。毎年6－10万人の大学卒業生を中西部に派遣させ、教師として担任させる。中央財政も義務教育の教師の国家レベルの養成計画に助成する。また少数民族の地域で二種類の言語の教師を養成し、教育の需要に応える。

(註)：中国から送られてきた日本語訳の原文を編集部で編集した。特殊教育の項は原文訳のまま。日本では特別支援教育との名称が使われている。

⑥ 第7期安東自由大学日程及び参加者名簿

第7期安東自由大学 日程 〈2013年8月31日～9月6日〉

日 時	日 程	宿 泊
8/31 (土)	17:00 結団式 羽田エクセルホテル東急	羽田 エクセルホテル東急
9/1 (日)	08:50 羽田空港発 (NH1161便) → 11:15 金浦空港着 参加者顔合わせ夕食会	ソウル President Hotel
9/2 (月)	ホテル発 → 専用バスで安東まで直行 (約4時間/昼食、途中で) 午後： 安東史跡参観しながら、宿舍へ 夕食： 安東市長招待宴 (交流集会・自己紹介)	安東 国学文化会館
9/3 (火)	午前： (昼食をはさみ) ～午後3時 報告と討論 「東アジアにおける義務教育の課題」 報告者：韓国、中国、日本 於：国学文化会館会議室 日韓通訳：2名 終了後、市内に移動し、ホテルにチェックイン 夕食：晩餐会 (韓国伝統法事食)	安東市内 リチェルホテル
9/4 (水)	午前： 教育学部： 安東市臥龍初等学校 (公立) 訪問 他の人々は観光視察 昼食時に全員合流し、視察と交流へ (きのこ鍋) 夕食：焼き肉 (安東畜産組合直営店)	安東市内 リチェルホテル
9/5 (木)	バス (チャーター) で、安東 → ソウル	ソウル President Hotel
9/6 (金)	12:40 金浦空港発 (NH1162便) → 14:45 羽田空港着	

宿泊ホテル：

9/1 & 5 (2泊)： ソウル — President Hotel

9/2 (1泊)： 国学文化会館

9/3 & 4 (2泊)： 安東市内 — Richell Hotel

第7期 安東自由大学 参 加 者

権 重東 (KWON Joong Dong) 安東自由大学名誉総長
韓国 I L O 協会会長

教 育 学 部

芹 沢 秀 行	(SERIZAWA Hideyuki)	神奈川県・団長
田 沢 憲	(TAZAWA Ken)	山梨県・事務局長
臼 倉 浩	(USUKURA Hiroshi)	千葉県
関 口 直	(SEKIGUCHI Tadashi)	静岡県
細 川 幹 太	(HOSOKAWA Mikita)	静岡県
松 原 大	(MATSUBARA Dai)	愛知県
藪 根 裕 生	(YABUNE Hiroki)	三重県
山 崎 裕 司	(YAMAZAKI Yuji)	三重県
丸 光 昭	(MARU Mitsuaki)	千葉県・日本中国国際教育交流協会監事
山 中 正 和	(YAMANAKA Masakazu)	日本中国国際教育交流協会業務執行理事・顧問
重 松 清 文	(SHIGEMATSU Kiyofumi)	東京都公立小学校元校長

文化・教養学部 (あいうえお順)

井 上 定 彦	(INOUE Sadahiko)	
黒 沢 一 夫	(KUROSAWA Kazuo)	
小 暮 剛 一	(KOGURE Koichi)	
高 須 とし子	(TAKASU Toshiko, Ms)	
中 山 智 雄	(NAKAYAMA Tomoo)	
初 岡 昌一郎	(HATSUOKA Shoichiro)	姫路獨協大学名誉教授 安東自由大学運営委員長
福 井 孝 幹	(FUKUI Takamiki)	
藤 沢 初 江	(FUJISAWA Hatsue, Ms)	安東自由大学事務局長
増 田 浩 司	(MASUDA Koji)	

中国からの参加

白 立 文	(BAI Liwen)	中国教科文衛体工会全国委員会（教育工会）国際代表
銭 海 雲	(QIAN Haiyun, Ms)	中国教科文衛体工会全国委員会（教育工会）職員
宋 秀 菊	(SONG Xiuju, Ms)	中国職工対外交流中心

ゲスト

梁 世 勲 (YANG Sei Hoon) ジャーナリスト、元韓国ノルウェイ大使

現地協力者

崔 宗 燮	(CHOI Jong-sub)	安東自由大学参与
明 眞 亨	(MYUNG Jin Hyung, Ms)	ボランティア通訳 (韓・日)
崔 美 善	(CHOI Mi Sun, Ms)	ボランティア通訳 (韓・日)

(2) 感想

1. 参加にあたって

昨年の第6期の安東自由大学への参加は、日韓関係がぎくしゃくしている時だからこそ、私にとってとても印象深いものになりました。また、全国から参加された教育学部の方たちとの交流も楽しく意義深いものでした。

そのような経験を持っていたので、第7期の参加を誘われた時、ぜひ参加をさせていただきたいと強く思いました。残念なことに、日韓の関係はネット上にとどまらず、極端なヘイトスピーチに見られるように、依然として芳しくない状況があると一般には受け止められています。しかし、このような状況にあっても、民間交流・自治体交流・個人の交流は脈々と続いていることは、間違いがないし、その交流の輪に、ぜひ私も加わりたいと思いました。



2. 教育シンポジウム

日本・韓国・中国の参加で行われた、「東アジアにおける義務教育の課題」の論議は極めて示唆に富むものでありました。とりわけ、各国の課題の共通性について確認することが出来ました。

その内容は、グローバル経済の発展の中で、各国とも経済格差は深刻であり、その経済格差が教育格差につながっていること、各家庭の教育費の負担は増しており、その結果、教育を受けた受益を公に返していくという意識は後退し、自らの利益に帰することは、当然だとする意識が広がっている状況です。さらにこのような状況を打開するために、道徳教育の強化がめざされていることを聞き、道徳教育が東アジア共通の課題となることが、強い印象として残りました。

3. 学校訪問

昨年の大邱に続いての小学校への学校訪問となりました。昨年在市内の中規模クラスの小学校5年生の英語の授業見学であったのに対し、今年は安東市郊外の小規模クラス（単級）の小学校6年生の現代史（科目名は探求）の授業見学となりました。そこでの印象は、研究指定をされている電子黒板や一人一台のノートパソコンの活用ということよりも、民主主義の実現というテーマを戦後韓国の現代史に直接題材をとって、子どもたちに考察させ、一定の結論付けを授業の中で実施していくという、授業実践の在り方への違和感でした。しかし、この違和感は、数日後訪ねた戦争博物館での見学を経て、この国、すなわち韓国における政治体制の方向づけと、密接に関わるのだという認識となりました。

4. 戦争博物館と国立博物館の見学

自由大学の自主的研修は、教育学部の皆さんと、標記タイトルの施設を見学することにしました。

- ① 戦争博物館は庭に飾られた朝鮮戦争（韓国標記＝韓国戦争）に従軍した兵士たちの巨大オブジェに目を見張り、展示内容に軍事的側面からの展示が多いことに驚きました。展示を見ていくと、まさにこの戦争が「自由と民主主義を守る戦争」であったことが、つぶさに読み取れるようになっていました。時間の関係で見学出来なかった、ベトナム戦争への従軍についても、アメリカと連携をして、「自由と民主主義を守る戦争」に参戦をしたのだという紹介を見ました。この建物は入場無料となっており、当日もたいへん多くの小中高生が見学をしていました。竹島（独島）のオブジェが、正面玄関入口にあったことをも記しておきます。
- ② 国立博物館では、古代以来の日本と朝鮮半島の密接な関係が、とても強く印象に残りました。とりわけ、特別展示の半跏思惟像については、見惚れてしまいました。

最後になりますが、受け入れてくださった韓国の皆さんのホスピタリティの高さに敬服するとともに、メンバーの皆さんとの食事等をともにする中で、培った交友に感謝を申し上げたいと思います。

まずこのたび第7期安東自由大学に参加させていただいたことに心から感謝いたします。参加がきまり、自分なりに安東自由大学の過去の内容等について学習したつもりではありましたが、実際に参加することで、設立時の崇高な理念とその理念を共有する多くの方々の深い思い、そして、6期にわたって重ねられた交流の重みを肌で感じることができました。

東アジアの歴史を学び、東アジア全体を通じて教育や文化の交流を図ることを目的として設立された安東自由大学は、まさに「参加者すべてが教師であり、生徒である」ことをモットーに企画・運営がなされていました。

国学文化会館で行われた開校式では、権安東自由大学名誉総長から熱い歓迎の言葉と社会における基礎教育の重要性が話され、初岡運営委員長からは安東自由大学の理念と今期安東自由大学において、東アジアの枠組みとしての有意義な話し合いが深められることへの願いが述べられました。また、中国から参加した白中国教育工会国際代表からも日中韓の深いつながりと国家の社会体制に関わらず国民の理念は近づいているというあいさつがありました。共通していたことは、東アジア市民という広い視点で互いに相違点を尊重しあいながらこれからの東アジア繁栄のために力を尽くしていかなければならないということであったと思います。

続いて、「東アジアにおける義務教育の課題」と題し、日本、中国、韓国それぞれから報告がなされ、討論が行われました。各国とも制度や社会的状況はちがうものの、家庭環境や地域による教育格差の問題や競争が過熱することにより弊害が生じていること、人が人として自立して生きていくための心の教育の重要性などが議論されました。結論を出すことが目的ではありませんし、また、簡単に結論の出せる内容でもないと思いますが、すべての参加者が教育の重要性を認識するとともに、各国の教育に対する課題や考え方を共有することが、今後のつながりや広がりをつくり出すために重要だと感じました。

このほかにも、最新のIT活用授業を取り入れた授業を参観させていただいたり、韓国精神文化の都といわれる安東の数々の史跡や文化にふれさせていただきました。また、毎晩行われた夕食会では地元の様々な方々が、私たちを歓迎してくれ、参加者のみなさんとともに、交流を深めることができました。書物やインターネットの情報からは決して知ることのできない韓国の方々の温かさを肌で感じました。

今回、安東自由大学に参加させていただき、草の根的な交流活動ではありますが、互いに理解を深め、思いを一つにしていこうとするみなさんから、多くのことを学ばせていただくとともに、改めて安東自由大学の価値を感じました。安東自由大学には卒業はないとのことですので、また参加できる機会を楽しみにしたいと思います。



「活気のある国。」

初めて訪韓し、持った印象です。どこを訪れても、韓国の“活気”を感じました。

例えば食事。毎回、その土地その土地の郷土料理をいただきました。どの食事もたいへんおいしい。驚いたのはその量の多さです。日本では、「出されたものを残すことは失礼。」にあたります。両親からも、「出されたものは残さず食べなさい。」と教えられてきました。おいしいから食が進むのですが、食べ終えた先からどんどんおかわりが出ます。特にキムチは辛くて本当においしい。つい箸が進み食べてしまうのですが、そうするとおかわりをどんどん出してくれる。今“お・も・て・な・し”がたいへん話題となっていますが、韓国流の“おもてなし”には、圧倒されてしまいました。

安東市内にある「市場」を見学する機会がありました。「市場」と聞いたので、野菜や魚を扱い、仲買人が多く

集まっている様子を想像しましたが、目にしたのは日本でいう「商店街」に近い景色のところでした。総菜、魚、野菜等を扱った店や、天ぷらやトッポギをその場で調理して売っていたり、自宅でとった野菜をフリーマーケットのような形で売っていたりする店もありました。そうした店が300mほどのアーケードに数多く並んでいます。通訳の方に聞いたところ、「若い世代は、最近ではスーパーを利用している。私たちの母親世代はこうした市場を今も利用しているが、利用する人が少なくなっている。」との話がありました。しかし、あちらこちらから人々の賑やかな声が聞こえ、多くの人が行き交い、たいへんな活気を感じました。子どもの頃、買い物かごを持って母親と夕食の買い物に行った商店街を思い出し、少し感傷に浸りました。

偶然ですが、中学生の社会科見学の一行と会いました。その中から、日本語が聞こえてきました。通訳の方によると、「韓国では日本のアニメを数多く放送している。日本のアニメを見るうちに日本語を覚える。」とのことでした。日本でも韓国のドラマは、数多く放映されています。私も見たことがあります。どれも日本語に吹き替えられています。韓国ドラマを見て、韓国語が話せるようになったという人は聞いたことがありません。韓国の人たちの語学の修得力に舌を巻きました。



初めての韓国は、行く先々でさまざまな発見、感動がありました。日本から、あまり出たことがない、また、出ることを好まない自分が少々恥ずかしくなりました。日本を一步出て、さまざまな人と出会い、多くのものを目にするには、これ以上ない学習です。今回の旅で出会った方々に感謝するとともに、こうした経験をする機会をくださった安東自由大学に心から感謝いたします。

安東自由大学から学んだこと

関口 直（静岡県）

今回の安東自由大学教育学部として参加するにあたって、自分なりに、3つの目標を立てた。1つは、韓国という国の今を感じるということ。2つめは、安東を知ること。3つめは、韓国の教育現場から学ぶということである。

1つめについては、言葉が分からない中でテレビを見たり、町にある様々な表示、施設に注目したり、慣れないハングルを一生懸命読みながら韓国の今を見ようと努力した。その中で見えたもの。テレビで天気予報では、しっかり竹島の天気、気温も表示していた。ビル群の中には、きれいな川が流れ、そこに多くの人が集っていた。日本語のできるボランティアの案内人がいろんな場所で施設の紹介をしていた、など。日本と同じものもあれば、やはり日本の方がすすんでいるものもある。どっちが優れているというのではなく、違いから学ぶことは多いと思う。

目標2つめについては、安東は初めての訪問で、ほとんど予備知識はないことから、見るものすべてが発見であった。最初に行った風光明媚な河回村では、韓国の伝統文化の村が今も息づいていた。夕食会に行くと副市長さんを始め、多くの方々が私たちを歓待してくれた。最初から最後まで心づくしのおもてなしをしてくれ、とても温かい人たちばかりで感激した。陶山書院では、儒教文化の伝統に触れ、この教えを今の時代に生かそうと安東市全体がとりくんでいることを知った。自由を国是として突き進んできた韓国だが、ここ安東市では、自由だからといってなんでもありではなく、しっかりと精神的な支えとしての伝統を重視し、それを儒学に求めている。日本人は何を支えとして国や地域づくりをしているのだろうか。

3つめは、やはり、今回の自由大学において最大の関心事であった小学校での参観と研修である。とても先進的な学校であることは聞いていたが、だからこそ、韓国が今めざしている教育の何たるかに直に触れることもできた。学校規模は6クラスと小規模ながらも施設はきれいでとても充実している。人工芝の運動場、併設された資料館、一人一台のパソコンなど、先進校にふさわしい充実した施設である。そこで学ぶ子供たちはどうだろうか。小規模だからなのか少し大人しいと感じたが、少人数の授業でそれぞれが課題に向かっている。日本のような元気な姿はないが、それは、訪問用の姿なのか、真の姿なのかは、わからない。ただ、やはり、国家の威信を

かけてすすめている政策であることから、地域、保護者、教職員の期待と努力の成果は出ているように感じられた。若干否定的な見方をすれば、今回行われた社会科の授業においてどれだけパソコンが役立っていたかは疑問である。テレビ電話を使ったとりくみも、やはり、実際にゲストティーチャーとして招く活動には及ばない。効率化すべきことと、多少手間でも直に触れるべきことをしっかりと峻別していくことは必要であろう。しかし、そのようなことを差し引いても、子ども一人一人の良さと学ぶ意欲を大切にしようとするとりくみは私たちが学ばなければならないことである。学校の中に自分を振り返る鏡を置いてある部屋があった。子どもたちだけでなく、私たち教職員も常に自分たちのとりくみを鏡で写し、振り返りながら前にすすんでいく姿勢が大切なのだと感じた。

今回、安東自由大学に参加し、韓国という隣国理解を通して、日本という国をもう一度見直すよい機会になった。教職員ではない経験豊富な参加者からもたくさんのことを学んだ。安東自由大学にかかわる様々な方々に感謝し、その恩に報いるためにも今回の学びをしっかりと現場に生かし、次世代につなげていくとりくみにしていきたいと思う。

深刻な幸福もの

細川 幹太（静岡県）

『安東自由大学』というセミナーへの参加についての話をいただいたが、韓国に対する知識は、ほとんどない。教員になった頃（1970年代前半）の指導要録には「本籍」の記載欄があり、何人かは「全羅南道…」「慶尚南道…」などと書かれていたことを思い出した。

出発までに、手元にある『故郷忘じがたく候』と『韓（から）のくに紀行：街道をゆく②』は読み直しておこうと思ったが、『街道をゆく』は、韓国行きの飛行機の中でも読み終えていなかった。『韓のくに紀行』の57ページに「…朝鮮語というのは、中国語ですか」と、よく問われる。アメリカ人がそう問うならともかく、「…海峡をへだてたとなりの国の民族がどういう言語であるかも知らずにすごしているのは、大海のなかの島嶼国家である日本の深刻な幸福の一つであろう…」とあった。自分はまさに、深刻な幸福ものである。かすかな「負い目」と一緒に、韓国に着いた。

一世代若い団員の方との話、『安東自由大学』を創設し運営してこられた方の話、初めて見る韓国の街や学校、韓国や中国の抱える教育課題など、韓国での5泊6日は密度が高く刺激的だった。

- ・ソウル市庁舎に隣接した図書館の学習コーナーの「36年間の日本統治」という言葉があった。「日本帝国主義による不当な支配」とか「日帝による併合」といった刺激の強い言葉でなく、日本語の表示には「36年間の日本による統治」と冷静な言葉が使われている。事実であっても「不当な支配」「併合」という言葉を突きつけられると痛い。
- ・安東市への移動のバスの中で、洋式便器がヤン（洋）ビョンギ、和式便器がファ（和？）ビョンギだと教えてもらう。どうして韓国では便器の区別を「洋式」「韓式」せず「ファ式」としたのだろう。ファは「和」それも「倭」「倭」？ どうでもいいような疑問。
- ・中国の都市と農村の格差、国土の巨大さと人の多さ、多様な民俗の存在について知る。都市に 出稼ぎに付いてきた子どもの就学問題、中国では学籍が本籍で管理されるという。住所（住民票）で管理される日本とは、基本的なところに違いがある。知らなかった。
- ・「孝」の教育の話聞き、韓国の生活に儒教が根付いていることを知る。自分は「孝」という言葉があまり好きでない。「孝」に「忠」が裏書きされていたことがその理由だ。今でも「自分の家族が暴漢に襲われるのを黙って見過ごすことができるのか。日本人として、日本の領土が脅かされるのを黙って見ていていいのか」というレトリックに生きている。韓国の「孝」には「忠」の裏書きがないと感じた。
- ・韓国の教育熱心さについて通訳のYさんからリアルな話を聞いた。「学びの動機付けをどうするか」といったことが随分とのんびりとした議論のように思えてくるが…。
- ・研究開発モデル校の施設の立派さと、現代史の授業で何人かの歴代大統領を実名を挙げて批判していることに驚く。韓国は義務教育費の国庫負担は10割だから、国が予算を付ければどのようなモデル校もできると言う。

国庫負担が100%というのは羨ましいが、教育内容の独立性はどのように担保されているのか、詳しく聞きたかった。つい最近と言ってもいい大統領を名指して批判するなど、日本の社会科の授業では考えられない。日本の民主主義についての感覚は「ぬるい」のか、「穏やか」と言えば、穏やかに済むのだろうが…。

安東自由大学のおかげで、自分のなかの韓国や東アジアへの扉が少しだけ開いた。いい時間をいただいたことに感謝している。

安東自由大学に参加して ～教育こそ、国際交流の柱～

松原 大（愛知県）

安東自由大学に参加すると聞いて、まず、「講義を聞いた後、テストなどを受けて単位を取得しなければならないのだろうか。」「情勢が不安定なのに大丈夫なのだろうか。」という不安な気持ちになった。しかし、出発前の結団式を終え、その不安な気持ちは吹き飛んだ。結団式において、顧問の山中さんから、安東自由大学では、「人と人との交流が大切である。考え方は違っても、子どもたちのために熱心に取り組んでいることを共有できるから気持ちよく帰ってこられる。」「すべてが教師であり、すべてが学生である。」ということを教えていただいたからである。東アジアの実情について不勉強なわたくしにとっては、参加意欲をかき立てられるたいへんありがたいお言葉であった。

羽田を出発し、あっという間に韓国に着いた。1日目はソウルでの夕食会、2日目は安東市に移動して史跡見学などを行った。その道中では、まず団員同士の交流が徐々に図られていったが、その交流がスムーズに運んだ陰には、団長や事務局長をはじめとする諸先輩方のお心遣いがあった。気さくに声をかけていただいて心をほぐしてくれたり、今までに経験されたことや学ばれたことを惜しげもなく語っていただいたりと、国際交流を図る前に、人と交流する上で大切なことが何であるかを学べた。また、安東の方々にも温かく迎えていただき、たいへんありがたかった。

3日目には安東自由大学国際セミナーが開かれ、いよいよ本格的な学びが始まった。「東アジアにおける義務教育の課題」というテーマで、日本、中国、韓国それぞれの国からの報告があった。報告を聞いた後、率直に思ったことは、「どの国においても教育が重要視されているということ」「歴史認識のすり合わせは簡単ではないが、子どもたちをしっかりと育てたいという思いは同じであること」である。そして、教育について語り合っているその空間の中に、国境は見えなかった。

このことからわたくしは、「教育こそ、国際交流の柱」にすべきであると強く感じた。国によってさまざまな考え方があるため、国語科や社会科、道徳などにおいて、子どもたちに何を、どのように教えるか議論することは難しいであろう。しかし、子どもたちの中で個人主義が蔓延しつつある中でどのように育てていけばよいのか、ということや、子どもたちの成長のために、何に、どれだけ人的・財政的な支援をするか、というようなことならば有意義な議論ができるのではないだろうか。

国際セミナーの終盤、次回の安東自由大学が、中国で行われる予定であることが示された。国際交流にむけての大きな一歩であると思う。報告の中で「教育とは努力であり、国を成長させる原動力」とあったが、今後1年間、それぞれの国がそれぞれの教育課題の克服のために努力し、次回、成果として得たことを報告し合い、共有する中で、国と国との距離がぐっと縮まることを、切に願っている。



国際セミナーの様子

参加の動機は、隣の韓国の小学校ではどんな環境でどんな授業をしているのだろう、教職員の勤務状態はどうなっているのか等、学校訪問への興味でした。また、25年前に訪韓した際、現地のガイドさんの説明の節々に反日的な思いを感じて戸惑った経験があったので、現在はどんな感触なのかという興味もありました。

現地では、権重東さん、梁世勲さん、それから崔さんをはじめ現地での手配や通訳等でお世話になったみなさん、また多くの地元の方々に手厚いおもてなしを受け、いろいろなお話を聞くことができました。今回の訪韓では、以前経験した国と国の感情はなく、同じ仲間だという温かい共同意識を実感しました。

国際セミナーでは、テーマ「東アジアにおける義務教育の課題」のもと、各国からの発表がありました。重松先生の発表は、学力テストの分析等を通して、子どもたちの人格・能力を育てるには家族や地域の絆づくりとともに教育格差解消等のための教育基盤の整備こそが大切だというお話でした。中国の白立文さんは、地域格差・学校格差・経済格差が引き起こしている中国における義務教育の深刻な問題と今後の課題を報告されました。韓国の権英俊さんは、人が人として生きるには、経済重視の国家的な教育ではなく、孔子の徳目の一つである「孝」の教育が必要であるというお話をされました。どの先生の発表も通じる部分があり、教育格差が生じ学力偏重・点数主義に陥っているとしかいえない3カ国の義務教育の現状に対し、アジアの未来を見据えた視点での忠告に感じられました。

臥龍小学校の訪問では、ICTの最先端機器を活用したスマート教育という新しい手法を用いる一方、心の教育を重視し、歴史や先人の生き方に学ぶ教育をしっかりと実践していることに驚きました。子ども一人ひとりに夢とやる気を持たせるために工夫を凝らした掲示物を校内の随所に見つけ、わたしたちの思いと共通したものを感じました。臥龍小学校で通訳してくださった緒方恵子さんは、市内案内での移動時間等いろいろなところでも話をしてくださいました。そのなかで、日本から韓国に移っての生活の変化や韓国での子育ての様子、保護者の目に映る学校や子どもの様子等、ご自身の経験からたくさん話してください、韓国の教育や学校、子どもや家庭の様子をより理解することができました。



全体をとおして、安東自由大学の「すべての参加者が師であり生徒である」という独特のポリシーは、まさにそのとおりでした。自分は「常に生徒」であり、とても「師」とはなり得ませんでした。出発前日の団結式から最終日に至るまで、様々な立場の参加者のみなさんが自由に発言され、自由に会話ができる雰囲気がとてもよかったです。そのなかで、多くの人から多くのことを学びました。とくに強く感じたのは、一言でいえば視野の広さと熱意です。東アジア市民社会の一員として、東アジアの教育の未来を展望するグローバルな視野、実際に3カ国の仲間がつながり、集まる熱意。その仲間に入れていただいた安東自由大学は、自分にとってとても刺激的でした。ありがとうございました。

2013年9月1日から9月6日まで、韓国の儒学の中心地とも言われる安東を中心に、第7期安東自由大学に参加させていただく機会をいただきました。この一週間余りの体験は、私にとって言葉では言い表すことのできない貴重な学びとなり、自分自身の価値観を見つめ直すきっかけともなりました。

私たちが訪問させていただいた安東市臥龍初等学校は自然豊かな農村地帯にある学校でした。しかし、敷地内は様子が一変し、グラウンドは人工芝と全天候型のタータントラック、玄関前にはハングルが流れる電光掲示板、教室には電子黒板、パソコン完備等々、時代の最先端を走る学校の様相を呈していました。国の指定を受けスマ

ート教育の研究校として現在推進していると説明を受け、一般校ではなく国の補助を受けているモデル校ということでした。ようやくこの教育環境にも納得することができました。

6年生の授業では、一人1台パソコンに電子黒板、教員の手にはタブレット端末、子どもたちも教員も慣れた手つきで操作していました。しかし、本当に感心したことは、授業内容についてでした。「韓国の民主化過程の教訓と課題を調べる」ことを目標に計画されており、授業では「民主主義」について子どもたちが、思い思いに意見交換している、そんな場面でした。環境がデジタル化していても、アナログ時代から大切にしてきたものを子どもたちにどう伝えるのか、教職員が創意工夫しながら教材化していることに、教育に対する教育関係者の思いや願いを感じることができました。



古きもの、新しきもの、相入れにくいもの等も否定するのではなく理解しながらとり入れようとする姿勢が感じられました。安東は儒教・儒学を重んじてきた伝統のある町です。その中でスマート教育授業開発を進めている学校の未来を感じることができる場面でした。

韓国、中国そして日本、領土問題や歴史問題が解決していない中で、安東自由大学にそれぞれの国から人が集い、歴史や文化、生活を学びあうことに私は大きな意味を感じました。そこに集った皆さんは個性豊かで魅力的な方々で、彼らは違いを排除することをせず、事実をしっかり受け止め、未来をみつめようとする仲間でした。国境を超越し市民的交流を拡大すること、そして相互の理解、和解、協力を深める主権者でありその主体となる意味を教えていただいたように思います。国家間の摩擦を直接的に解消していくことに多くの者は展望を持てませんが、隣にいる人との相互理解、和解、協力からはできるはずです。

豊かに手をつなぐとりくみを進めていきましょう。

安東自由大学に参加して

丸 光昭（千葉県）

「安東自由大学とは何か」「なぜ、安東なのか？」という素朴な疑問をもっていました。それは、長い間日中国際教育交流協会の監事をやらせていただいている関係で、事務局の方から丁寧な報告を受けて素晴らしい取り組みであることは承知しておりました。ただ、実際体験してみたい思いが募ってまいりました。今回、第7期安東自由大学への参加が実現し、うれしく感じると共に何かを掴んでこようと決意を新たに参加しました。

まず、結団式での安東自由大学の特徴は、1. 歴史を学ぶこと。2. 国際交流（人間交流）であること。3. すべての人々が教師であり、すべての人々が学生であること。そして、自由に討論できる手づくりの大学である。ということをお教えいただきました。

特に、「すべての人々が教師であり、すべての人々が学生である」という考え方は凄いと感じました。とかく、講師と学生が対峙し教える側と教えられる側に別れるのが普通の状況ですが、自由に学び合う姿勢にその価値があると思われます。

素晴らしい晴天の中、2日目に安東に到着しました。まず、安東史跡の訪問です。2010年7月にユネスコ世界遺産に登録された安東河回村への訪問です。最初に芙蓉台から河回村を展望しました。日本の白川郷を想わせるような瓦屋と藁葺き屋が連なり、まとまりのある伝統の村が目の前に現れ、これは素晴らしいの一言でした。

この村は、豊山柳氏が600年余り代々暮らしてきた同姓村で、良好な状態で保存されてきたものです。また、この村には「河回別神グッ仮面舞」という12世紀の半ばから庶民によって披露されてきた仮面舞が伝統的に残っております。私も人間文化財である李相浩さんから直接指導を受け、恥ずかしいやら緊張しっぱなしでしたがよい



体験になりました。【写真右】

その後、安東市長主催の夕食会が開催されました。

副市長はじめ多くの市関係者の歓迎をいただき感謝の気持ちでいっぱいでした。韓国宮廷料理の数々、安東焼酎、マッコリ、ビールなど大変おいしくいただきました。さらに、仮面の着いた棒ネクタイをプレゼントされ感激しました。



3日目（9月3日）は、いよいよ本番とも言える「第7期安東自由大学国際セミナー」の始まりです。国学文化会館1階会議場には、日本・中国・韓国を代表する主題発表者と来賓、そして各国を代表する役員と参加者が続々と集まり熱気に満ちていました。テーマは、『東アジアにおける義務教育の課題』であります。まず、権重東安東自由大学名誉総長より、基礎教育は社会で一番大切に話されるものであり、たくさんの学生が主張し、引き継いで発展させていくべきものである。とのご挨拶がありました。続いて、初岡昌一郎日本側代表から、迎え入れてくれた安東市すべての皆様に感謝します。今回で7回目を迎えることができました。白立文さんはじめ中国の方々が参加してくれたことは意義深く、地平が開かれた思いである。安東自由大学はすべての参加者が教師であり学生であり、お互いが学び合うことで成立してきました。率直な語らいは共通の絆をより強くするものです。とご挨拶がありました。

また、中国側代表の白立文さんからセミナーに参加できてうれしい。「すべての人が先生であり、生徒である」という初岡先生の言葉に感銘を受けた。中国・韓国・日本は共通の文化をもっている切っても切れない関係であり、国民の心・理念がだんだん近づいている。安東市もこの会場も素晴らしい所で感謝している。とご挨拶がありました。

主題発表では、韓国の権英俊さんから先生が学生に学生が先生になれるのは世界でここだけだと思う。人間は今まで生けるように生きてきた。現在生活している私達にとっての教育内容とは何か、それは親孝行の「孝教育」である。親を喜ばすことが孝である。孝というのは尽くすべき人が生きている以上することです。との発表がありました。

日本代表である重松清文さんからは、日本における義務教育の課題として、学力問題の背景にあるものをテーマに、学校効果を上げるためには、学校間の競争や各家庭の教育力に任せた教育ではなく、家庭・地域の教育力や教員の指導力の向上を重視した政策が重要であること。そして、離婚率・持家率などとの関係、障がいのある人への理解と支援は「平等・人権尊重」の根本に関わることである、などデータをもとに発表された。

中国側代表の白立文さんは、はじめに中国では誰が一番疲れているか、それは子どもである。教育をどうするか、道徳・宗教などにもかかわる問題である。経済は成長したが、教育・医療・社会保障に課題があると考えている。改革は教育からと考えている。原点に戻り、教育は何かと問われるべきで、子どもを人間として立派にするより就職のことを考えすぎている。国民の素質教育が問われている。など実情に則した貴重な発表がされた。

各国の実際の教育課題がわかりやすく素晴らしい発表であり、勉強になりました。

次に、第4日目は安東市臥龍初等学校への訪問です。門を通過して学校に一歩足を踏み入れると、まず「自然豊かできれいな学校だなあ」という印象でした。最初に権さんより挨拶があり、教育について交流を大切にしたい。我々は、人間において教育は共通の価値を持つべきものであり、先生方には外国人に差別を行わないことをお願いしたい。韓国の教育者との触れ合い、そして実践を伝えてほしい。と述べられました。

臥龍初等学校は、韓国の教育情報優秀学校でデジタル使用のモデル校であり、慶尚北道安東教育支援庁の指標は、「希望と感動を与える幸福安東教育」です。そして、施策として、1. 新しいアイディアを育てる（智）、2. 眞の心を育てる（徳）、3. 一緒にしよう！幸福教育（通）を掲げ、基礎学力や英語教育の向上、眞の心を培い、安東人の育成、学生・保護者・地域社会が共感する教育に取り組んでいます。

また、権在席校長から、本校は1933年9月15日の開校であり、教訓は「健康で賢い臥龍の子ども」です。小学生74名、幼稚園19名の在籍で自然に親しむ教育環境があり、心の教育では毎日新しい臥龍教育で子どもたちは日記をつけている。一人ひとりの学生が座右の銘をもつことにしている。読書・英語の日常的な教育とゴルフ・英語・コンピューターなどの放課後授業のプログラムも設定され、生涯学習のための書道教室も実践しているとのこと。2012年3月には、「慶尚北道教育庁指定スマート教育研究学校」となり、5月には、「大韓民国 素晴らしい学校」にも選定された、との説明がありました。

そして、各学年の授業を参観し、特に6年生のデジタル教科書活用によるスマート教育の実践を見せていただきました。「わが国の民主政治」としてプレゼンテーション、学習カードやデジタル機器を利用した先進的な授業が展開され素晴らしい授業でした。学級児童数も11名と理想的な人数で一人ひとりが討論したり、発表したり積極的な姿勢が印象的でした。

その後、陶山書院、森林博物館などを見学し、最後の夕食は豪華なもので上等の焼肉とおいしい安東焼酎とマッコリ、そして韓国料理と何から何まで充実した日々を送ることができました。高級安東焼酎のプレゼントまでいただき恐縮してしまいました。

安東市を上げての歓迎、素晴らしい自然・人々・子どもたちとの出会い、おもてなしの心に接し、当初の目的であった1. 歴史を学ぶ、2. 国際交流（人間交流）、3. すべての人々が教師でありすべての人々が学生である手づくりの自由大学の意味が短期間ではありましたがわかったような気がします。また、日本から一緒に参加した方々は、一人ひとりポリシーをもった存在感のあるリーダーでありお会いできて良かったです。素晴らしい思い出ができ、心から感謝申し上げます。

5人の日本人の一人として

山中 正和（日本中国国際教育交流協会）

第7期安東自由大学は、安東自由大学の原点に戻ったようだった。

ソウルから安東へのバス旅で立ち寄るサービスエリアは、リニューアルされ、レストランのメニューは大幅に増えた。安東市内にはなかった高速バスのターミナルのおかげで、市内へのアクセスは格段に改善された。世界文化遺産に指定された安東史跡で最も名高い河回（ハフエ）村に入るには、以前は村の前まで観光バスが横付けされたが、今や整備された停留場で下ろされるため、ここからかなりの長い道のりを歩かねばならない。

安東市は前市長時代、安易な工業化を避け、洛東江に抱かれた生きたままの自然の風景と、農業立国を目指して地域を発展させてきた。ちなみに、第7期安東自由大学の受け入れの中心となったのは、韓国で第一の規模を誇る安東市農協の方々だった。何千年と暮らしてきた安東の人々の生き方を尊重した安東は、訪れる人々の心を和ませ、大いに安東の魅力を感じさせたものである。

2007年、安東を訪れた初岡昌一郎先生を初めとする、5人の日本人と韓国の権重東先生（元労働長官）、梁世勲先生（元ノルウェー大使）の7名は、早速安東市庁を訪問し、安東市の観光・農業先進地域としての説明を市長から受けたのだった。その際、市長は厚さが5cm近い一冊の本を各自に手渡した。

本の名前は「懲毖録」（チョウヒロク）、著者は柳成竜。時の領議政、総理大臣の記録だ。

時とは豊臣の朝鮮侵略時代、韓国では壬辰倭乱という。平時の朝鮮王朝は、文武の文を優勢にした両班（ヤンバン）の一派の強い意向により、日本の武力を見くびったため、容易に豊臣の侵略を許してしまった。平凡社で出している東洋文庫に日本語訳がある。

この本の価値あるところは、朝鮮侵略が、朝鮮側から記述されているところにある。

何故こうもたやすく侵略を受けてしまったのか。何故、抵抗する力をまとめられなかったのか。何故、大陸との関係がうまくできなかったのか。これらが、時の最高権力者によって赤裸々に語られる。さらにいえば、時代を主導していた両班、すなわち儒学者たちの歴史上の功罪も見えてくる。しかし、日朝関係はその後平和的に江戸時代には文化の風となった朝鮮通信使を登場させる。短い平和交流を経た後、日朝関係は、再び侵略が繰り返された。…韓国の各地には壬辰倭乱で、日本水軍を破った英雄像がそびえ立っている。

交流を考える、交流を行なうことは互いを知ることでもある。歴史の一部であるにせよ一面からではない立体的な歴史の見方は、交流の中味をより深めることができるのではないかと思う。

第7期安東自由大学では、中国が加わった。東アジアで交流の歴史を考えると、中国抜きには考えられない。安東自由大学は人と人との交流という交流の原点を常に暖め、「すべてが教師であり、生徒である」という関係を大切に、再び羽ばたこうとしている。時代がそのことを求めている限り。

安東市前市長金暉東氏は、今回も受入れの中心であったばかりか、退職後大学教授として「儒教資本主義」をテーマに研究を進められている、という。

■第2回教育交流ホームステイ in 山梨（教育交流・研究等助成事業）

（１）教育交流ホームステイ実施要綱

■要 綱

1. 名 称 第2回教育交流ホームステイ『夏の山梨ホームステイ』
2. 期日・期間 2013年8月17日(土)～19日(月)（2泊3日）
3. ホストファミリー 5家庭とします。
4. 参加留学生 5名
5. 往復日程 8月17日 参加者甲府駅改札口集合
10:37着 あずさ9号（9:00新宿発）→ ホストファミリーへ
8月18日 終日ホームステイ
8月19日 15:30ごろ甲府駅改札口集合
16:10発 甲府始発 かいじ118号（全員乗車）
6. そ の 他 ①学生には、旅行保険を掛けています。
（本人は健康保険証を持参しています。）
②ホストファミリーは、事前に簡単な予定表（書式自由）を提出して下さい。
③ホストファミリーは、ホームステイ終了後、報告書をお送りください。

（２）第2回教育交流ホームステイ

■内 容

- 日 程 2013年8月17日から20日
- 場 所 山梨県内各地
- 参加留学生 司 穎（女・18歳、江蘇省）、 杜 妮（女・18歳、湖北省）、 張 偉（男・18歳、山東省）
王佳奇（男・20歳、遼寧省）、 呂 濟 平（女・20歳、内蒙古）
- ホストファミリー
霜村 文晴（小学校教諭）、 田草川 耕（小学校教諭）、 服部 町子（前教頭）
八野 耕一（教育公務員弘済会）、 内藤 重明（校長）
- 世 話 人 笹本 信二（山梨県教職員組合副執行委員長）
荒川 優子（フジ国際語学院校長）
山中 正和（日本中国国際教育交流協会業務執行理事）

（３）ホストファミリーからの報告

■ 1. よかった点など

- A 今回留学生を受け入れるにあたり、妻と相談しながら「日本の生活の様子、日本の文化や伝統、自然の素晴らしさを感じてもらいたい。」という思いで三日間の計画を立てた。留学生と一緒に三日間を過ごす事で、私たち夫婦が改めて自分の国、又は山梨（笛吹市）を再認識する機会となった。わかっていても実際に足を運んでみなかった、鳴沢風穴や笛吹川での鵜飼など、改めて郷土の素晴らしさを実感する事が出来た事は我々にと

っても、素晴らしい機会となった。

学生は、普段は自分で料理をつくるという事なので、得意の「麻婆豆腐」の作り方を教えてもらい、みんなで食べる事が出来た。日本で作っているものとは違い、本場の麻婆豆腐の作り方を教えてもらう事が出来たことに感謝している。先日は、レシピを思い出して妻と二人で再度麻婆豆腐を作ってみた。私たち家族にとって新しいレパートリーがひとつ増えた。この日はもうひとつ「餃子」を作った。これは日本でいつも作っているやり方で「日本風の餃子」を作った。やはり中国とは作り方など違う事がわかった。

初めに私たちが抱いていた中国人のイメージと、実際に目の前にいる中国人のギャップがとてもあった。いろいろな報道で耳にしたり目にするものが全てではなく、実際に交流をして初めてわかることがたくさんあった。あさはかな考えの自分に気がつく事が出来た。

B 大変な努力をして単身で日本に来てまで勉強しようとする姿は、私たち夫婦だけでなく、二人の娘にとっても大きな刺激となった。また、それぞれの文化を理解しようとするよい契機となった。私たち家族にとっても貴重な体験となった。

- ・山梨の食・歴史・産業・風習を少しではあるが感じてもらえたと思う。
- ・お互いにお互いのことを話し、郷土のことや肉親のことまで話題にでき心の交流ができ、信頼関係を築くことができた。
- ・本人が自分の将来を自ら切り開いていこうとする姿を間近に感じ、大いに期待をもてた。

C 三日間という短期間にもかかわらず、充実した時を過ごせた。

- ・私たち夫婦の所属する様々な会（詩づくりの会、英語で各テーマを論ずる会、中国文化研究会など）にも一緒に参加し、多くの人々との交流や意見交換ができた。
- ・山梨の自然に触れてもらい、富士山近くまで行き、美しい姿を見てもらったこと。

D 日本語がとても堪能であることに加えて、日本の習慣などもよく理解していて、コミュニケーションをとることにおいては、互いに困惑することがなかった。

- ・日本の食事や食材については、好き嫌いが全くなかったもので、献立等気を遣うことがなかった。
- ・甲府駅で受け入れてから、甲府駅で集合・出発まで全てホストファミリーに任せてもらったこと。
- ・学生の住んでいたチンタオの高層マンション、東京で住んでいるアパート、そしてホストファミリーの地区にそれぞれ特徴があり、それらを経験することができてよかったのではないかなと思われる。（同じ日本でも都会と田舎があることや都会のラッシュと田舎のローカル電車、ビルやアスファルトと田舎の田園風景等）
- ・学生が一人っ子政策の状況で、18歳にして日本に来てまで学ぶ姿や意欲をみて、日本の子どもたちに何が必要か改めて考えるためのよい機会となった。

E 我が家に子どもがいず、ホームステイのホストも引き受けたことがなかったもので、初めは、不安と戸惑いがあった。“この3日間をどのように過ごそうか”といろいろ考えたが、学生と接する中で、予定をいくつか変更した。2泊3日という短い期間だったが、“日本の良さ”とはいかなくても、山梨県の素晴らしさを体験してもらえたと思う。私たち夫婦にとっても楽しい思い出となった。

■ 2. 学生について

A とても礼儀正しく、素直で親しみやすい好青年であった。お風呂などは「最後にしてください」といい、掃除までしてくれた。食事後は必ず妻と一緒に皿洗いをしてくれた。

日本語を習得しようとする意欲がとてもみられ、いろいろな事に関心を持ち行動する姿が見られた。私の息子2人は県外の大学に行っているため、直接会う事は出来なかったが、長男とはFace Time（TV電話）を通じて話をした。同級生という事もあり、その後もMailなどを通じて、お互い交流を図っている。

一生懸命に学習し、ひとつひとつ自分のものにしていこうと、自分の将来に向けてがんばっていく姿が見られた、素晴らしい青年であった。

B とにかく素晴らしい。礼儀正しく、包容力があり、様々なことを吸収しようとしていた。

思わず今後もサポートしたくなるように感じた。

将来のビジョンをしっかりもち、それを実現する為に今しなくてはならないことが明確で努力している。

早くうち解けることができるよう、ホストファミリーへの気遣いに好感がもてた。

蕎麦打ち体験では、「こねる」「のす」「切る」「茹でる」行程を初めてとは思えないほど熱心に行い、美味し

い蕎麦をいただくことができた。食の文化の一つを、体験を通して理解しようとしていた。

積極的に日本語を話し、分からないことは分かるまで質問して理解しようとする姿に好感がもてた。

- C 物おじせず何事にも積極的に好感の持てるよい性格。

礼儀正しく、その場所、その時をどうふるまうべきかわきまえていて、感心させられた。

将来への希望や夢を持ち、中国人として、日本とどうかかわっていくべきか深く考えている点も素晴らしい。

- D 日本の文化や生活に親しもうとしたり、体験しようとしたりする姿勢が随所にみられた。

(例) 茶道でのお手前体験

ホストの地域で伝承している神楽練習の見学

ぶどう園の見学や摘み取り等

礼儀正しい学生で、ホストファミリーの地域の人たちからも評価された。

- E 内気で、なかなか会話が续かず、心配したが、素直な子なので、自然体で接するようにしたら、自分から話をするようになったり、片付けを手伝ってくれたりした。カレーとサラダを一緒に作ったが、切り方や作り方を教えると言われたとおりにやっていた。真面目で一生懸命取り組む子だと思った。自分の将来像を明確に持っていて、それに向かって頑張っている姿が会話から見る事ができた。

■ 3. 今後への希望、改善して欲しい点など

- A 三日目の帰宅時刻がもう少し遅いと、活動の内容がもう少しゆとりを持って行えたと思う。

- B 事前の説明会や昨年の冊子を送っていただいていたので、あまり不安には感じていなかった。また、パーソナルデータは食のアレルギーや接し方を考える上などで大変役立った。

長期休みを利用してのホームステイは仕方ないと思うが、山梨の暑さに参っていたようなので、今後考慮できるならば実施時期の検討も考えてもよいかもしれない。

- C 特にありませんが、駅で対面するまで、全く本人との打合せが出来ず、これから「こんなスケジュールでいかが?」と知らせたり、意向を尋ねることもあった方がいいかなとも思いました。(今回は、本人がすべて了解してくれて予定通りの行動でしたが…)

- D 特になし。

- E 今年は実施時期がお盆続きの3日間だったので、どこも混雑していて、移動が大変だった。お盆の前か後の週がよいと思うが。

(4) 訪問先一例

北杜市明野町フラワー公園 (ひまわり畑) 清里高原観光と散策

ホストファミリーの地域散策 (武田八幡宮・白山温泉・大村美術館)

ホストファミリーの勤務校

中学校部活動見学、図書館見学

県立博物館見学、久保田一竹美術館見学

富士山観光、忍野八海・水族館見学、河口湖散策、山中湖散策

八ヶ岳南麓観光、浅間神社見学、昇仙峡観光

武田神社参拝

鵜飼

ほったらかし温泉

サッカー J1 観戦

ぶどうの丘センター、桃狩り

他、自宅、親戚宅などあり

(5) 学生報告 (原文のまま)

私の視野が広がった

司 穎 (18才)

8月17日、私の日々期待するホームステイはやっと始まりました。待ちに待っていましたが、私の人生の初めのホームステイなので、緊張しました。この日は早く起きました。荷物を片付けてから出発しました。新宿でみんなと待ち合わせたあとで、一緒に甲府への道に踏み出した。一時間半の旅、クラスメートたちは寝た。しかし私はずっと考えていて、私が参加するホストファミリーはどんな家庭でしょう。そういう気持ちを持って、一時間半が過ぎていました。甲府出口で、ホームステイの富士国際語学院の大きな看板やそれぞれの私たちの名前を書いている看板も見ました。その時、私はドキドキしていた。私はまだ私の名前を見つけられない時、霜村さんご夫妻はもう私を見つけました。霜村さんご夫妻はとても暖かいひとたちでした、私も緊張がほぐれました。

最初、霜村さんご夫妻は私をつれて喫茶店へ行きました。お互いに自己紹介をしました。霜村さんご夫妻は家で私に両親が何か呼ぶと聞きました。えいちゃんと呼ぶと答えました。それで、霜村さんご夫妻はえいちゃんと呼びました。四ヵ月間両親はそばにいないから、とても暖かいものを感じました。霜村さんご夫妻は娘さんがふたりいると聞いた時、私は本当に嬉しいかったです。私はずっと日本の女の子の友達を作りたいと思っていました。もっと今回のホームステイはきっと私の人生の中に貴重な記憶になると感じました。

今回のホームステイ本当におもしろいでした、一つ一つの名所は私が初めて日本で印象深く、私は神社で正しい拝法を学びました。過去の甲府の城門を見ました。歴史上の偉い人物が分かりました。甲府の独特の自然の風光の昇仙峡、まだ甲府の水晶を見ました。曇りのせいで、全容の富士山を見ていないだけですが、河口湖の美しい風景を見ました、鳴沢氷穴も行きました。遊覧船に乗って、カチカチ山ロープウェイを乗りました。ソフトクリームを食べました。桃もとってたべて、ワインの工場を見物しました。ほうとう、手作うどん、とんこつを食べました。所々に独特の記憶をくれました。第一夜のBBQ本当にとても興奮して、これは私が初めての家庭でのBBQでした。私の家のマンションで、庭がないですから。本当に1回貴重な体験でした。よる、みんなは照明の下で一緒に座って、あゆちゃんとみちゃんと一緒にそれぞれの学校のことを話して、本当に面白かったです。私は最も印象深いのはおばあさんの家でそばを作ったことです。自分の手でそばをつくるのは本当貴重な機会でした。こんな機会をいただき、ありがとうございます。おばあさんの制作指導の元で、そばは本当に美味しかったです。

今回ホームステイでは、私は日本の多くの文化を感じました。たとえば食事では、霜村奥さんの朝食は本当にとてもおいしいです。日本式朝食と中国式のは差がとても大きいです、日本式朝食は野菜、魚、盛り付けも特別です。中華料理は普通はすべて饅頭小籠包と豆乳などです。霜村奥さんの凝った朝食にありがとうと言いたいです。私は最大の違いは中国と日本の教育制度だと思います。テレビで見た高校のおまつり、野球の試合、日本の高校生の生活は本当にうらやましいです。最後の日、霜村さんご夫妻は私を連れてみちゃんの学校を見て、昔ドラマで見たとおりで、私の視野を広げます。

最後、私にこんな機会を与えてくれた公益財団法人日本中国国際教育交流協会に感謝したいです。そして、霜村さんご夫妻に暑い中私を色々なところへ連れて行って、くれ、毎日世話してくれて、本当に感謝しています。私は今日本語があまり上手ではないです



から、今回たくさん日本語が話せます。理解できないとき、詳しい説明ありがとうございました。またお土産は、本当にありがとうございました。あゆちゃんとみちゃんもありがとうございました。私達はずっと連絡していきますよ。とみちゃんは26日から学校が始まるよ、優秀な留学生になるために頑張ってね！

日本の中で一番おいしい桃

王佳奇（20才）

山梨県にホームステイを始めたことがありました。日本の家族と一緒に生活する経歴がありました。とても貴重と思います。四か月くらい日本に住んでいますから、たくさん日本の文化わかりません。だからときどきしながら山梨県への電車に乗りしました。

たぶん二時間がかかりました、山梨に到着しました。田草川 耕さんに会いました。そして、私を駐車場へ連れていきました。駐車場へいくと、耕さんの奥さんに会いました。奥さんは若い、きれいな人です。自動車で耕さんの両親の果物屋へ行きました。そこでおばあさんとおじいさんに会いました。耕さんの両親は身体が健康でありました。年をとっているけれど、今まで自分で桃と葡萄を育てています。とても偉いと思います。ここでいろいろな桃と葡萄だべました。日本の中で一番おいしい桃だと思います。おじいさんは中国語と英語を話せます、すごいです。それから、耕さんの果樹園へ行って、自分で桃を摘みました。中国でなかなか桃を摘んだことがないので、本当に嬉しかったです。昼食後では、近くの公園へ行きました。この公園では、山梨県のブドウ畑の全景を見ることができます。しかし暑いから、写真を撮ると、すぐに離れました。その後、ワインの工場に行きました。ワインは様々な過程で年代別に作られていました。それからいろいろな味のワインを試食しました。

夕方には、一緒に山梨中銀スタジアム行きました。ここでヴァンフォーレ甲府 vs 川崎フロンターレのサッカー試合があり、観戦しました。私はあまりサッカーをしません、でも試合を見るのが大好きです。前半に甲府チームのボールが川崎のゴール入って得点しました。選手たちは沸騰してました。わたしもとても興奮しました。でも様々な理由のために、甲府チームは試合に負けました。本当に残念でした。私はいつも甲府チームを応援します。家へ帰る途中で花火が見えました。ロマンチックでした。

夜飯を済ませた後、携帯電話のソフトで私の両親と耕さんの家族が会話を楽しみました。言葉の壁があっても、とても楽しかったです。私の母は大連に住んでいて、画面を見ながら、仲良くしてくれてありがとうございます、と中国語で言いました。しかし、時間が遅くなったので、私は寝るために耕さんの息子さんの部屋行きました。部屋はとてもきれいでした。たくさんの賞状、写真をみて、びっくりしました。息子さんは体が強いし、ハンサムだし、それにすごい人と思いました。とても息子さんに会いたいです。

次の日の朝、息子さんと連絡を交換することができました。本当に息子さんに会うチャンスができました。とても嬉しかったです。でも日本語が下手だし、興奮して、こんにちは、だけとしか言えず、後悔しました。この日は富士山へ行きました。行く途中でいろいろなすごい所を私に説明しました。例えば時速500キロの電車とか。名前はリニア新幹線と言うそうです。たぶん一時間半かかりました。青木ヶ原樹海で洞窟探検ができる鳴沢氷穴に到着しました。氷穴は寒かったけどきれいでした。大自然は本当に魔法のようです。それから渡辺うどん屋へ

行きました。人気だし、食べ物おいしいしかったです。たくさんの日本の物を食べると日本の文化をわかることができます。そしていろいろな豆腐を試食しました。富士山の中で一番広い湖へ行きましたー山中湖です。景色はとてもきれいでした。でも雲があるので、富士山なかなかみえませんでした。残念でした。

夜ご飯はとても特別でした。一緒に日本式のギョウザをつくって、自分で麻婆豆腐作りました。でも唐辛子味噌入って、とても辛くて私は恥ずかしかったです。いくら辛くても、日本の家族は全部たべました。感動しました。日本のギョウザの作り方と中国の作り方は全然違います。でも美香さんが作るギョウザの味は私の母が作る



ギョウザと同じでとても美味しかったです。それから、鵜飼を見ました。おもしろかったです。夜にほったらかし温泉に入りました。温泉からは山梨県の全ての景色が見えました。不思議な所でした。終わってから、元気になって気持ちが良かったです。

今日はホームステイの最終日、悲しかったです。朝、葡萄園へ行きました。おいしい葡萄を摘みました。私は美香さんに日本の料理を習いました。そして、二つ有名な神社へ行きました。一緒に祈りました。私の願望は有名な大学に入ることと、田草川家族いつも幸せであることです。神社で日本の古代史代を習って、古物を見ました。美香さんは私にお守り買ってくれました。耕さん仕事がありましたから、東京までの電車が出発するとき、会えないと思いました。4時10分に電車が行きます。4時09分のとき耕さんと美香さん一緒に電車のホームに現れました。そのとき気分は言葉で表現することができませんでした。とても感動しました。

このホームステイは最も貴重な経験です。たくさん写真を撮りました。この写真はいつも大切に保存されています。日本人はとてもいいと思います。美香さんは優しいし、きれいだし、それに親切な人です。作る料理はいつもすごいおいしいし、母のように私の世話をします。耕さんは仕事があるけど富士山の旅行のときずっと運転していました。とても疲れたと思います。本当にありがとうございました。このホームステイは一期一会です。ぜひもう一度田草川家族に会いたいです。この経験を決して忘れないだろう！

私のホームステイ

杜妮（18才）

4月17日、あの日はわたしが日本へ来た日です。4ヶ月後の8月17日、私はホームステイに参加しました。

ホームステイに参加した人は全部5人です。みんな違う家庭へ行きました。私の家庭は“服部”です。

みんな駅へ迎えに行きました。初めて服部さん見た時、私は服部さんが親切なおばさんだと思いました。挨拶したあとで、“プレゼントは何がほしい”聞きました、“いいえ、いいえ、なんにもいりません”といって、でも、服部さんは私に買い物した。きんちゃくチーフと合格祈願のお守り意味のハンカチをくれました。

17日、私とおばさん一緒におばさんが毎月いく日本詩のパーティーへいきました。みんな詩を書いて、自分でよみました、本当にすごかった。わたしも2つ目を書いてみました。初めて日本語の詩を書いた気持ちはよかった。

あとは私達はおばさんの英語クラブへいきました。あの日いた人は4人です。みんな60歳以上です、わたしはほんとにビックリしました。中国で、60歳以上な人は勉強している人はあまりいません。けれど、マージャンをしているひとはおおいです。みんなおかしをたべながら、英語で中国と日本の関係を検討しました。でも、空気は全然重くないです。

服部さんの夫は彼の友達のいえで私達をまっけてしまいました。おじさんの友たちは犬飼先生です。犬飼先生の趣味は中国文化です。先生の家にはたくさん中国の本と骨董品があります。いろいろなものを見学しました。

服部さんの家は自分で木で建てた家です。おじさんは東京工業大学の教授です。いつも外国へ出張します。家の一階はいろいろなくにお土産があります。

3人はレストランでフランス料理をたべました。あのレストランはすごくきれいです。蒼井優のドラマおせんのレストランみたいです。

18日、おばさんは本格的な日本朝ごはんを作りました。納豆と焼き魚と味噌スープをたべました。やはりわたしが一番好きな和食は納豆だ。

午前、私は甘酒を飲んだり、久保田一竹美術館を見たり、美術館で昼ご飯をたべました。

午後はくるまで河口湖をみました。富士山も見ました。そして、モーターボートで河口湖のなかであそびました。

家へ帰った前に、私はおんせんをはいりました。初めて温泉をはいりま



すから、新鮮感がいっぱいあります。

夜で、私はふるさとしかない熱乾麺をつくりました。おばさんとおじさん美味しいと言いました、私は嬉しかったです。

19日、じかんの経つのは本当に早いもので、あっという間に全てすごされました。恵林寺へ行って、お祈りしました。

もうすぐさようならと言わなければならないと、惜しかった。私と服部家族に約束した、“きっと、また会います”。

いろいろ想像していて、わくわくしていた

呂済平（20才）



ホームステイに参加するのは初めてです。甲府へ行く電車の中に、ホストファミリーはどんな家庭とか、この数日間に何をするとか、いろいろ想像していて、わくわくしていた。きっと、一生忘れない記憶が作られると思いました。

甲府駅の中に初めてホストファミリーの方と会いました。私を迎えたのは八野さんと奥さんです。とても親切な人だと思います。それから、お二人さんは車で私を連れて食事しに行って、そして一緒に八ヶ岳に観光して、山梨県のすばらしい自然風景を初めて拝見した。山梨県立美術館で、違う時代違う画家を描いた富士山によって、富士山が日本人にとってはどんな神聖なものが、少し

ずつ分かりました。帰宅途中にお二人さんとたくさんしゃべって、私はお寿司が好きだと言って、それで夕方三人一緒にお寿司を食べに行きました。八野さん夫婦は私にいろいろなお寿司をすすめてくれて、私が贅沢みtainお寿司一つ一つを味わって、本当にお寿司に深く愛しているになった。夜、奥さんが私を和室に休ませて、初めて地味な和室に寝て、すごく喜んでいた。

次日早く起きて、八野さん夫婦と河口湖周辺へ行きました。河口湖公園から富士山がしっかり見えます。こんなに近く見ると、ちょっと感動していましたね。そして富岳風穴に向いました、風穴の中の温度も0℃あります、やはり自然力は不思議ですね。そのあと、河口湖オルゴールの森美術館に入りました。すでき洋式庭で歩いたり、自動演奏楽器を奏でる見事な音楽を鑑賞したり、幸せな感じが出てきました。もちろん一番面白いのは猿まわし劇場です。猿たちは可愛いし、頭もいいし、すばらしい演出もでるし、そして観客たちが大声で笑って、惚れてしまいました。

帰宅すると、奥さんと一緒に夏カレーを作りました。私が料理を作るのはちょっと不器用ですが、奥さんは丁寧に教えてくれて、なかなか美味しいカレーが作られました。八野さん夫婦と一緒に晩ご飯を食べて、楽しくて、そして久しぶりに自分の家族と食事する感じも思い出しました。

19日の朝、私たちはとても有名な観光地―昇仙峡に向かいました。覚円峰も見ました、なんとなくそんなに美しい景色にうっとりしました。最後武田神社に参りました。武田信玄さんのことはちょっとだけ知っていますが、信玄さんがいた場所はまさか今の山梨県が初めて知りました。そこに奥さんが合格御守をくれました、私必ず大切にします、そして勉強頑張ります。

いよいよホストファミリーと別れになる、みんな別れ惜しんで、一緒に最後の記念写真を撮りました。

私のホームステイはちょっと特別だと思います、大量の時間は八野さん夫婦と旅行をして過ごしました。まるで移動しているホームステイですね。八野さん夫婦にお世話になるので、心から感謝します。本当にいろいろ勉強して遊んで、すごく楽しくて最高の体験です！

いよいよ夏休みが終わって、迎えてくれるのは忙しい日常勉強といつもの生活に戻る。日本へ来て、一番喜ばせるのはこの夏休みのホームステイのことである。外国人の日常生活を体験するのはドキドキしたが、好奇心がいっぱいあるので、楽しんでた。

8月17日、期待をこめて、精一杯で山梨県への電車に乗った。ホームステイの内藤校長は早めに待っていた。駅に出たとたん、こういう期待させる三日間の不思議な生活が始まる感じがした。

内藤さんは僕を案内して家へ連れて行ってくれた。途中で驚いたのは山梨県は爽やかな風が吹いていることであり、いまは夏のちょうど過ごしやすい気候であった。山々が重なって緑だらけで、東京より静かで、暮らしの天堂である。自然や部屋と似合うほどユートピアみたいところであった。

話で表せない美しさほど、写真が付いている。

家について、昼ご飯のあと、内藤さんの妻・和子さんは僕を連れて、茶道を習いに行った。

日本の茶道は世界で有名な歴史文化である。いつも神秘感をくれた茶道がそんなおおく、複雑な礼儀は初めて見た。

焼水、飲茶、お菓子、味わう、お茶たて。全部礼儀に従って、間違えないでやらなければならない。茶道は女性の姿の端正や礼儀の厳や歴史的な悠長が徹底的に表現できるものである。茶道は単純な飲茶に楽しくさせるではなく、先人の優秀伝統を続けられるものだと思う。

茶道のあとは晩ご飯の時間であった。内藤さんの息子さんは忙しいところをわざわざ来てくれた。驚いて感動した。

内藤さんの息子さんはいつも笑顔が顔に浮かんでいて、ハンサムな人だと思う。晩ご飯の時、内藤さんたちと日中文化の区別や生活習慣や吟味した。地域によって、習慣と文化は違うという結論が出た。いろいろ勉強になった。一日の疲れと楽しさを持って、畳で寝て、第一日が終わった。

山梨県は果物を誇るところである。第二日、内藤さんたちは僕を連れて、葡萄棚へ葡萄を取りに行った。葡萄を取った時、僕はさすが果物の天堂だと思った。実は親指ほどの大きさであって、驚いた。農場の主人は精一杯の育てるのがなければ、こういう立派な実はない。食べてみたとき、汁がいっぱい出てきた。砂糖よりもっと甘いほど糖度を初めて味わった。

これは取った葡萄である。内藤さんはおっとりして、葡萄を持って帰って、友達に配って食べてみようと言って言った。内藤さんはいつも優しくしてくれて、嬉しかった。

葡萄棚のあと、私たちは向日葵を見に行った。

こういう素晴らしい向日葵は都市で全然見えないと思う。僕はこの景色を見た時、嬉しくてたまらないほど、「向日葵の海だ！」と言っていた。

向日葵群の真ん中は黒い向日葵を組み立てたハート型であり、確かにロマンチック満々な所であった。恋人は続々写真を取りに行き、愛の話で誓った。羨ましいとは言えず、幸せにするのを祝った。

このあと、山梨県の超人気の蕎麦屋へ行って、美味しい蕎麦を食べた。美味しすぎたので、写真を取るのを忘れてしまった。食べてしまったあと、気づいたが、もう遅かった。

午後は和子さんからパンの作り方を習った。

初めてパンを作ってみたが、失敗する感じが全然無かった。和子さんの細心のことから。

作った時、ずっと「まずいことはないでしょう」と思っていて、とうとうがっかりさせなかった。僕の笑顔から見て、きっと成功の作品だろう～

晩ご飯の後、もうすぐ来る舞いのための練習を見た。

正式な服着ていなくて、ただ練習だけが、みんなの本気と真剣は日



本人は団結意識が強い民族だというイメージをくれた。感動した！

月曜日の忙しい仕事のため、サプライズ満々な第二日が終わって、早く寝た。

月曜日の朝、内藤さんたちは仕事しなければならなかったもので、小林さんに私をお願いした。この朝は、内藤さんと和子さんちゃんと別れた。この間のお世話を感謝した。私は涙ぐんで、内藤さんたちに見えないようにずっと我慢した。

もう一回写真をみて、何も言わないで、幸せはこの一瞬で永遠になった。

もう一回、「ありがとうございます」と言いたい。

この作文で記念して、私のホームステイの生活であった。

■第9回日本語作文コンクール（教育交流・研究等助成事業）

2013年度第9回日本語作文コンクール（日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛）には、中国全土の市区の166校から2,938編の応募がありました。日本語コンクールは今まで8回開催され、留学経験のない中国大学生延べ16,000人の応募を数えるまでになりました。特に、2013年1月にNHKで放映されたドキュメント現代では、日中間の草の根交流の姿が伝えられ、全国的な反響を呼びました。

本年度のテーマは“中国人の心を動かした「日本力」”でした。協会はこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞（教育賞）2編を選出しています。本年度の教育賞受賞者は、趙思蒙さん「遅い春の訪れを待つ」、李彤さん「愛に満ちた中日へ」でした。

最優秀賞・日本大使賞（日本一週間招待）は、李敏さん（国際関係学院）が受賞しました。以下、教育賞作品を掲載します。

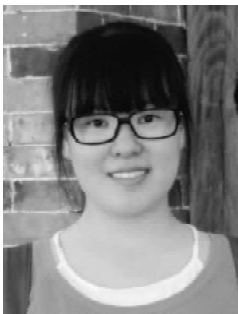
■教育賞・日中国際教育交流協会賞（5万円相当）

趙思蒙 首都師範大学
李 彤 中国医科大学



遅い春の訪れを待つ

首都師範大学 趙思蒙



大学の合格通知書を受け取ったら、誰もが嬉しいはずだ。

その日、私と家族は喜びに満ち、一緒に大学の合格通知書の封を開けた。しかし、「日本語学部」の文字が目飛び込んだ瞬間、みんなが静まりかえった。自分の呼吸が聞こえるようだった。その結果を見ると、祖父は一人、黙って部屋に戻っていった。

私の祖父は今年84歳になる。若いころ軍隊に入った職業軍人の祖父は、日本を良く思っていないのだろう。私は生まれて初めて、こんなに悲しそうな祖父の後ろ姿を見た。私より祖父のほうが、もっと複雑な気持ちにちがいない。自分のかわいがっていた孫娘が日本語を勉強する。将来、日本に関係のある仕事に従事する可能性もある。以来、隣人が私の専門について聞くと、祖父は「外国語について勉強している」とだけ答えた。祖父の口から出る「外国語」という響きは、鋭利な匕首のように私の心に突き刺さった。日本や日本語、日本人…そのすべてを否定する必要があるのか。私は祖父の言行に対して気落ちすると同時に、すこし憤りをおぼえた。それから長い間、祖父とはこの話題について話さなかった。

ある日、日本人の友達の渡辺さんを私の家へ案内した。渡辺さんは私の祖父に会うと、朗らかな声で挨拶した。祖父は笑わず、すこし目配せした。渡辺さんはその原因が分からず、続けて「我很喜？中国。」と、あまり上手ではない中国語で話しかけた。渡辺さんが「仍仍、叔叔」と言うと、突然、祖父が笑った。私がすぐに『叔叔』は、中国語で中年の男性の意味で、『お爺さん』は中国語で『勵勵』と言うんだよ。」と説明すると、みんなも笑った。この小さな失敗のおかげで、祖父は渡辺さんに笑顔を見せた。食事の後、祖父は大きな紙に「中日友好」と筆で書き、渡辺さんに贈った。

駅まで見送る途中、渡辺さんは「趙さん、ありがとう。」と言った。「え？」と聞き返すと、「先日、町にたくさ

んの破壊的な反日デモ隊がいて、私は日本人として、とても怖かった。でも、こんなに緊迫しているときに、趙さんと同じように親切な家族に会えて、本当によかった。日本と中国も私たちのように親しくなれたらいいね。」と言った。私の心は渡辺さんの話に大いに触発された。

家に帰ると、祖父は私に言った。「ごめんね、蒙蒙。子供のとき、私の両親は不幸にも戦争でなくなった。9歳の私はどうやって生きていくか分からなかった。16歳で軍隊に入った。戦友は私にとって家族のようだった。でも、多くの戦友が戦争でなくなった。なぜ戦争が起こるのか？ 日本の情報を見ると、両親と戦争でなくなった戦友の顔を思い出し、悲しくなる。蒙蒙が大学の合格通知書を受け取った日、私は心からあなたを祝福した。でも…私はいろいろな気持ちが入り混じり、何を話せばいいか分からなかった。今日渡辺さんと話し、とてもうれしかった。私は生まれて初めて日本人と話した。渡辺さんが一生懸命中国語を勉強している様子を見て、蒙蒙も同じように日本語を勉強している様子を思い浮かべた。将来、日本に関係のある仕事をしたら、必ず中国の素晴らしい文化を日本人に紹介してほしい。いつか日本に留学する機会があれば、もし私が生きていたら、私を日本に連れて行ってほしい。私は自分で中日友好と生の日本を感じたい」。聞いた後、渡辺さんの顔が脳裏に浮かんだ。祖父も渡辺さんも中日友好を願っているのだ。私は涙が静かにこぼれた。

今年、北京の春は遅い。しかし、春は必ず訪れる。同様に、私はいつか必ず日中関係が改善されると信じ、その日が来るのを待っている。そして、祖父の願い—私が日本語を勉強し、将来、日中交流の懸け橋となること—それが実現すれば、祖父が70年もの間待ち望んでいた遅い春が、ようやく訪れるにちがいない。そのためにも、私はもっと真面目に日本語を勉強して、積極的に日本人と交流しよう。祖父と渡辺さんとともに、遅い春の訪れを待つ。

愛に満ちた中日へ

中国医科大学 李彤

彼女と初めて出会ったのは、去年の生物化学の授業でした。日本人の留学生で、彼女は最初教科書がなかったので、一緒に使いました。

「ありがとうございました。」と微笑んで私に大きくお辞儀しました。

日本人のマナーをその時はじめて分かりました。

これをきっかけにして、私たちは友達になりました。時々、彼女は日本語を教えてくれました。私はお礼にギターでカノンを弾いてあげました。練習不足でいつも失敗してばかりでしたが、彼女はとても喜んでくれ、私も嬉しかったです。私はとても不思議な気持ちになって胸が熱くなりました。人と分かり合えた、心が通じ合えたと感じました。

それから一年経ち、私は日本語である程度コミュニケーションをとることが出来るようになりました。そして、私は初めて、彼女の身の上話を聞きました、「おととしの東日本大震災で、両親の命が奪われ、天国へ旅立ちました。」その言葉を聞いた時、体に電流が走ったような衝撃を覚えました。

いつも笑顔に満ちている彼女でしたが、今まで彼女のことを知らなかった私は、急に彼女のことが心配になりました。彼女は、生まれ育った家や両親や楽しく過ごした故郷を、突然離れなければならなくなりました。異国の地に来て、はじめ中国語が話せなくて、どれだけ寂しかっただろう。これから中国でどのような生活を送るのか、孤独な時はどうするのか、幸せになれるのか。

けれども、彼女は何も気にせず、精一杯言葉や文化の壁を乗り越えて頑張っています。

一カ月前、四川大震災の時、彼女はすぐに被災地へ千元寄付しました。理由を聞かれた時、彼女は「感謝されたくて助けるのではない、助けられる命があるから助けるのだ。微力ですが無力ではないでしょう。災害に遭った時の無念の気持ちや悲しさはよく分かります。親友が亡くなったことを思い出したから」と言いました。彼女のキラキラと輝く瞳には、大きな大きな強さと愛が感じられました。

実際、災害を目の前にして、国籍は重要ではありません。誰でも迷子のように、こわがり、苦しみ、いらいらする気持ちは同じです。私たちが、地球に生まれて、アジアに生まれて、この時代に生まれたことは、まさに「運



命」です。国と国の境とは、ただ一つの線でしかありません、世界は一つの家だと思います。

振り返れば、戦争は怖い存在だと思います。実際に戦場を体験したお爺さんによると、兵隊がどこまでも優先で、住民はまるで、虫けらのように扱われて、食べるものも、着るものも、寝るところもありませんでした。私は呼吸するのも大変なくらいのショックを受けました。現在、戦争や争い事はほとんど収まっていますが、これをきっかけに、愛に満ちた中日を作るのは当面の急務だと思います。

また、最近テレビで連日世界卓球選手権大会を見ました。中日の対決は厳しいですが、最後、馬琳は意外にも松平健太に負けてしまいました。憤りはなく、軽蔑もなく、不満もなく、私は勝者敗者それぞれが、お互いをたえあって抱き合う姿に感動しました。これ以上ない素晴らしい中日友好だと思います。思えば、中日は海で隔てられていますが、肌の色も瞳の色も同じです。違った環境で育ってきても、使う言葉が違っても、習慣や風俗が違っても、みんな心の底で美しい未来を祈っています。

愛に満ちた中日とは、ただ単に国交を回復すれば良いということではなく、中国人も日本人も、お互いを信頼し、思いやり、多くの交流、感謝する気持ちを持つことだと思います。時代が変わり、愛の形が変わっても、中日みんなの温もりは、いつも私達を支えてくれているのだと改めて感じます。圧倒的な中日民衆はきっと私と同じです。両国は一日も早く、冷たい溝をまたいで、幸せになる方向へ、一步一步進んでいって欲しいと願っています。

(1) 2013年度宋慶齡基金会との教育支援に関する協議書

合作协议书

为了促进中日两国之间的友好交流，帮助中国经济欠发达地区教育事业的发展，中国宋庆龄基金会与公益财团法人日本中国国际教育交流协会愿意在今后共同的活动领域中相互协助。为达成以上目的，特签订以下协议。

第1条（目的及用途）

- 公益财团法人日本中国国际教育交流协会为了帮助中国河北省易县的儿童，特通过中国宋庆龄基金会对其进行资助，帮助其提高教育质量、完善教育环境。
- 为了改善河北省易县的中小学校的教育环境，我们将提供下述条款中所提到的资助。下一个年度再根据双方的最新意向协议来开展项目。

第2条（汇款及报告）

- 在2013年度，公益财团法人日本中国国际教育交流协会为改善河北省易县中小学的教学条件，决定通过中国宋庆龄基金会捐赠200万日元，其中100万日元用于购买音乐设备捐赠给当地学校，100万日元用于在易县开展为期三天的音乐教师培训。
- 公益财团法人日本中国国际教育交流协会在2013年7月30日前将捐款200万日元拨至中国宋庆龄基金会指定账户。中国宋庆龄基金会收到捐款后，将这笔捐款用于以下事项：

(1) 其中100万日元的捐款用于购买音乐设备捐赠给易县当地受助学校。

(2) 将其中约100万日元的捐款转交河北省易县教育局，用于资助当地开展中小学音乐教师的培训。

(3) 完成音乐教师培训项目后，如捐赠款项仍有结余，结余款项将转交河北省易县教育局用于制作课桌椅，并送到资助学校。

中国宋庆龄基金会在项目实施完成之后，将实施报告（包含具体的项目实施内容和决算）提交给公益财团法人日本中国国际教育交流协会。

双方同意以上协议，并将此协议制作成中日文各两份，在双方代表签字盖章之后，各保存中日文一份。

中国宋庆龄基金会
代表：
2013年6月21日

公益财团法人
日本中国国际教育交流协会
代表：黑田文男
2013年7月1日

(2) 会報「共生力」 18号、19号

(次頁より掲載)

2013年度教育支援に関する協定書

公益財団法人日本中国国際教育交流協会と中国宋慶齡基金会は、日中両国の友好交流のため、また中国の経済的に遅れた地域で教育事業を促進させるため、今後共同の活動領域において互いに協力していくことで合意した。こうした目的を達成するため、以下の協定を結ぶ。

第一条（目的及び用途）

- 公益財団法人日本中国国際教育交流協会は、中国河北省易県の児童・生徒に対する教育交流・支援を中国宋慶齡基金会を通して行う。これによって教育環境を改善し、教育水準を向上させる。
- 河北省易県小中学校の教育環境を改善するため、以下の項目に関して教育交流・支援を提供する。次年度以降は、改めて双方の最新意向を協議し、項目を決定する。

第二条（送金及び報告）

- 2013年、公益財団法人日本中国国際教育交流協会は中国河北省易県の小中学校の教育条件・教育レベルを改善するため、200万日本円を提供する。その中に音楽道具支援の100万日本円と3日間の音楽教師養成セミナー費用100万日本円を含めるものとする。
- 公益財団法人日本中国国際教育交流協会は2013年7月30日前に200万日本円を中国宋慶齡基金会の指定口座に振り込むこと。中国宋慶齡基金会は振込金を受け次第、それを以下の事項に使う。
 - 其の中の100万日本円の支援金を購入して河北省易县教育局を通して地元の小中学校に贈る。
 - 其の中の100万日本円の支援金を河北省易县教育局に贈り、当地小中学校音楽教育者の研修支援に使う。
 - 上記項目を達成する上で、寄付金がまだ残った場合は残額を河北省易县教育局に贈り、机と椅子を作ることに使う。作った机と椅子は援助学校に寄付する。

中国宋慶齡基金会は項目が完成する際に、実施報告（具体的項目の実施内容、決算を含む）を公益財団法人日本中国国際教育交流協会に提出する。

双方は以上の協定に同意し、この協定を日本語と中国語共に各二部を作成し、双方の代表が署名捺印の上、それぞれ一部を保存するものとする。

公益財団法人日本中国国際教育交流協会
代表：黒田文男
2013年7月1日

中国宋慶齡基金会
代表：宋慶齡
2013年6月21日

共生力

HP: <http://www3.ocn.ne.jp/~koryu/>

Tel: 03-3222-4190 Fax: 03-3222-4199

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-3-9 第2太陽ビル301

発行人: 黒田文男

黒田代表理事ら中国を訪問

各団体、困難な時期での訪問に歓迎の意



黒田代表理事と李寧宋慶齡基金会秘書長（基金会本部）

2月25－27日、黒田文男代表理事、山中正和・吉田一徳業務執行理事、初岡昌一郎理事の4名は、北京を訪問し、中国宋慶齡基金会をはじめ、中国教育国際交流協会、中国教育科学文化衛生体育工会全国委員会（旧称・中国教育工会）と会談しました。各団体からは心のこもった歓迎を受けると共に、友好を確認し、今後の事業についての建設的な意見交換を行ないました。また宋慶齡基金会との会談には、協会の周牧之在北京駐在名誉代表が同席されました。

易県音楽教師養成5周年を記念して

易県音楽フェスティバルを

2月26日、一行は宋慶齡基金会を訪問し、李寧秘書長と今後の取り組みについて意見交換を行ないました。

李秘書長は、昨年の訪中団の計画を乱して申し訳ない、今までつちかってきた信頼関係を大切に、これから

の交流について意見交換をしたい、と述べました。

また、貴協会と宋慶齡基金会との共同プロジェクトが育ててきた「易県音楽研修プログラム」は、音楽専任教師の少ない貧困地域で、大きな貢献を果たしました。黒田代表は、このプログラムに過去4回すべて出席され、これまでに電子キーボードを300台寄贈されました。今後どのように発展させるのか、影響を拡大させるのか、研修の意欲や質をどう高めるのかを考えたい。今年は5年目にあたるので、その成果を披露したいと思っている。例えば、音楽フェスティバルなどを易県と相談してみたい。

黒田代表理事は、私たちの交流は友情から生まれたものです。これまでの交流は日本と中国の教育交流に寄与したと思います。易県でのプロジェクトを開始した時は、道路は舗装されておらず、校舎も貧しく、教室に入ると、机はあっても、椅子はありませんでした。休み中は自宅に持ち帰っていると聞きました。今は道もよくなり、親しい友人も増えました。訪問するたびに、子どもたちの学習意欲には感動しています。今までの交流の節目として、電子キーボードのヤマハとも連携して、音楽フェスティバルの開催に賛同したい、と述べました。

協会は、昨年三重の先生方とともに易県を訪問した経緯を踏まえ、2013年度に宋慶齡基金会の教育代表団の日本（三重）への招へい状を手渡しました。また、今年8月に協会役員、各県代表から構成される10名規模の易県訪問代表団の訪中を要請しました。



宋慶齡基金会より寧夏への支援を提案

李秘書長は、易県プログラムを広げる方向もあるのではないかと、寧夏自治区でのプロジェクトを提案しました。提案では、寧夏彭陽県は回族が多く居住する少数民族自治区で、基金会の援助対象県である。また、胡啓立主席のゆかりの地でもある。1980年以来、外国企業の援助の実績がある。しかし、音楽教師養成などのプログラムは経験していないと述べ、黒田代表に寧夏彭陽県の実態を見て欲しい、と述べました。会談には、基金会連絡部副部長・宋健、基金部項目処処長・史金龍、国際処副処長・劉穎他の皆さんが参加されました。

中国教育国際交流協会を訪問



中央・黒田代表理事、右・林佐平常務理事

2月26日、一行は中国教育国際交流協会を訪問し、林佐平常務理事と旧交を暖めると共に、最近の日中関係について懇談しました。

黒田代表理事は、情勢が厳しい時こそ、私たちの育んできた友好交流活動が大切である、と述べました。林常務理事からは、日本人日本語教師の中国高等教育機関への派遣についての提案がありました。

双方は、互いの分野で、共通点を大切にして、交流を進めていくことを確認しました。

会議には、亜太部主任助理・張瓊瓊、徐穎他の皆さんが出席されました。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

フジ国際語学院卒業式に参加

3月6日、赤岡直人理事（第1回教育交流ホームステイ代表）山中業務執行理事は、フジ国際語学院（山中小白代表）第23回卒業式に、協会を代表して出席しました。昨年夏、『第1回教育交流ホームステイ in 山梨』を開催するにあたって、赤岡理事には、自らホストとしても学生を受け入れていただきました。ホームステイへの参加学生は、フジ国際語学院の中国人留学生（2012年度4月入学者）で、貴重な家庭体験を得ることができました。卒業式は、卒業証書授与と共に、実行委員会学生の進行のもと、全校生徒約1000人が参加し、和やかな雰囲気の中で終了しました。

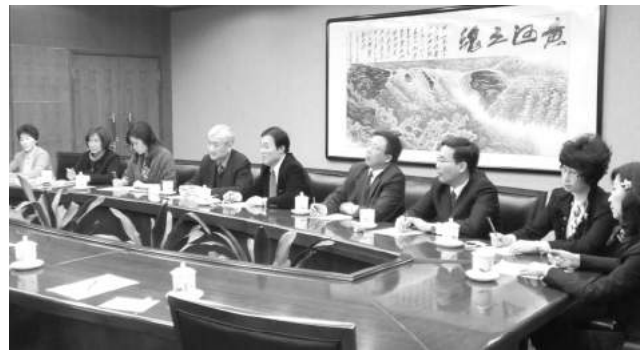
第6回評議員会・第11回理事会

事業計画・収支予算を満場一致で確認

冒頭、黒田代表理事から日中間の困難な状況を打開するため、協会代表が訪中し、今後教育交流を進めるための会談を行い、今後の事業についての双方の意見交換したことを報告しました。

また、平成25年度事業計画、収支予算などを満場一致で確認しました。

教育工会を訪問



左から4人目万主席、右隣白立文国際代表（中華全国総工会にて）

2800万人組合員を代表して歓迎

2月25日、一行は中国教育科学文化衛生体育工会全国委員会を訪問し、万明東主席以下工会幹部と歓談しました。主席は冒頭、日中関係が困難な時期に関係改善のため訪れたことは大変重視しています。2800万人の組合員を代表して、今日は北京にいるすべての役員が参加しました。と熱烈歓迎の言葉を述べました。又、主席は、日教組との間には長年友誼の関係を進めてきました。今こそ、実質的な交流が大事な時期だと思います。また、貴協会の中国訪問に際しては、便宜を図りたいと話されました。黒田代表からは、万主席の言葉を日教組に伝えようと共に、教育工会の厚意に対する感謝を述べました。



教育工会からは、万主席以下、主席待遇国際代表・白立文、副主席・陳志彪、副巡視員・袁茂清、調研処部長・万珍麗、教育部部長・周曉慧、中華全国総工会国際部副部長・彭勇、同亜太処副処長・邱麗珍、中国職工対外交流センター副部長・宋秀菊他の皆さんが出席されました。

【北京寸観】

やや空席の目立つ機内を背に、訪中団一行が到着した北京空港は、小雪交じりの天候だった。その雪も宋慶齡基金会からの迎車で市内に入るところには止み、春節後の空気の汚れはいささかでも清浄されたようだった。翌日、市内でも、マスク着用の市民を見るのは稀で、昼には青空も覗いた。北京を立つ日の朝、超高層ビルの間には、ぼやけた太陽が見えた。スマホの天気予報には、「北京もや」と見える。帰国後翌28日、北京の車は、ライトをつけ、ビルの上部は見えなかったと新聞記事にあった。この日の北京。PH2.5は。(y)

公益財団法人日本中国国際教育交流協会

会報 NO. 19

2013. 10. 9

共生力

HP: <http://www3.ocn.ne.jp/~koryu/>

Tel: 03-3222-4190 Fax: 03-3222-4199

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-3-9 第2太陽ビル301

発行人: 黒田文男

第5回易県音楽教師養成研修

協会から8名の代表団が参加

中国宋慶齡基金会との共同プロジェクト第5回易県音楽教師養成研修(音楽教師培訓)が、中国河北省易県で、8月19日から3日間にわたって行われました。5年目の節目を迎えたということで、当協会からは、黒田文男代表理事、吉田一徳業務執行理事のほか会員組織代表を合わせて8名の代表団が研修に参加しました。

開会式では、初めに主催者を代表して易県人民政府、趙春生県長から、教育支援に対する感謝とともに、この貴重な機会に自分の専門的素質を高めて、生徒たちが、すくすく成長できるようがんばってくださいと、挨拶がありました。

↓研修の様子



中国宋慶齡基金会連絡部、陳愛民部長からは、宋慶齡主席の「明日のために、子供のために」という主旨のもと、農村での基礎教育と教師素質の引き上げに力を入れている、音楽教育もその一環であり、生徒たちが、より専門的な音楽教育が受けられ、音楽への夢を持てるために、より多い専門研修の機会を提供したいと、挨拶がありました。

黒田代表理事は、音楽は歴史や文化の理解に欠かせない基礎的な教科であり、研修を通じて、皆様が音楽教育に一層励まれ、子どもたちの教育水準の向上と、未来の

日中友好に寄与されることを心から祈っていると、挨拶しました。

研修は、河北省メディア学院から、劉礼民音楽工学部主任ほか、5名の講師を招き、小学校と中学校の2グループに分かれて行われました。今年度支援した電子キーボードも参加者各人に用意されていました。

また、代表団と参加教師の代表10名とで、懇談会を行い、易県での音楽教育の現状、日本の音楽教育の状況、電子キーボードの活用などについて意見交換をしました。3日間の研修は、声楽の基礎、発声、キーボードによる即興演奏、授業への応用などの内容で行われ、約100名の教師が参加しました。

易県第一小学校、易県大龍華中心小学校訪問

代表団は、参加教師との懇談後、研修会場の易県第一小学校と、郊外にある大龍華中心小学校を訪問しました。



易県第一小学校



大龍華中心小学校

第一小学校では、児童代表による学校紹介や施設の案内、楽器演奏などの歓迎を受けました。大龍華中心小学校では、伝統的な文化を子どもたちに伝えるために夏休みに行っている、体操で表現した論語の朗読を披露してもらいました。

中国宋慶齡基金会を表敬訪問

8月20日、協会代表団は、宋慶齡故居を見学し、中国宋慶齡基金会を表敬訪問しました。井頓泉副主席はじめ、基金部、国際部の方々に迎えていただき、親しく懇談させていただきました。

前、中日友好協会副会長であった井頓泉副主席からは、プロジェクトへの支援に対する感謝に続けて、易県の子どもたちは、きっと中日友好の力になるでしょう。同じアジアの同胞として、建設的な友好関係を共同でつくっていききたいとの言葉がありました。



井頓泉副主席(右)と黒田代表理事

宋慶齡基金会教育代表団と教育交流

11月 三重県で

11月5日から10日まで、第三次宋慶齡基金会教育代表団を三重県に迎え、教育交流を行います。

7日の学校訪問、音楽授業の参観、意見交換会をはじめ、日本の教職員との交流会、三重県庁への訪問などを予定しています。

第7期安東自由大学

東アジアの教育をテーマに盛んな論議

9月1日から6日まで、第7期安東自由大学が慶尚北道の首都となる予定の安東市で開催されました。日本からは、安東自由大学教育学部11名（芹沢秀行団長・神奈川、田沢憲事務局長・山梨）と文化教養学部9名、計20名が参加しました。今回は中国から新たに3名が参加し、地元安東市からの30名を加え、「アジアの義務教育」について東アジア各国の課題を出し合い、活発な討論を行いました。

開会に当たって、権重東安東自由大学名誉総長から、基礎教育は社会で一番大切にされるべきであると挨拶がありました。

初岡昌一郎運営委員長から、安東自由大学の歴史的意義の確認と支えていただいている安東市はじめ安東市民の皆さんへの感謝が述べられました。また、鄭亨鎮国立安東大学総長が歓迎の祝辞を述べました。

日本からは、重松清文氏（元東京公立小学校長）が「学力問題の背景にあるもの」と題し、日本の義務教育の課題について報告し、学力格差が、地域共同体や家族のありかたと密接な関係があることを指摘し、学校間競争や各家庭の教育力に任せるのではなく、地域格差の改善や指導力の高い教師の育成の必要などが指摘されました。中国からは白立文氏（教育工会）が、中国の義務教育の実態を具体的に報告すると共に、地域格差の実態、農村と都市出稼ぎ農民に同行する子どもの実態を報告しました。韓国からは権英俊氏（安東大学名誉教授）が、韓国



の家族のあり方や人との繋がりを紹介し、「受ける人が亡くなっても、孝を尽くす人が生きている限り大切にされなくてはならない」と述べ、「孝」教育を提唱されました。参加者の活発な討論ののち、権名誉総長は、差別なく教育を受けるという中でこそ安東自由大学も発展する。教育の基本的な価値である自由、人権を議論し、永遠な教育の価値を保つために来年も同じテーマにすることを提案すると述べました。

9月6日、教育学部一行は、公立臥龍初等学校（権在度校長）を訪問し、韓国のスマート教育の一端を参観しました。

過疎地域ということもあり、全校生徒74名＋幼稚園児

19名という小規模学校でしたが、ここ数年国のデジタル教育・英語教育のモデル校として研究を進めている。5月には、「大韓民国 素晴らしい学校」にも選定されたそうです。芹沢団長は、「子どもの幸せのためには、教育が鍵を握っている。国際交流の柱は教育にある」と挨拶しました。

参加者は、国学文化会館（国学とは儒学をさす）に宿泊したほか、河回村、陶山書院など、儒学の聖地といわれる安東市を参観し、河回村では世界文化遺産の「仮面劇」に参加体験するなど、安東自由大学のもつユニークな研修を十分に修めました。

※スマート教育……韓国政府は、デジタル世代の登場によって、個人の素質に合わせた教育方法への転換が求められるとして、2016年度からの実施を目標にデジタル教科書等の開発支援を行なっている。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

第2回教育交流ホームステイ in 山梨

元気いっぱい・感激いっぱい



第2回教育交流ホームステイ in 山梨が、8月17日から19日まで、暑さ真っ盛りの山梨県で行なわれました。中国からの留学生5名は山梨の教職員のご好意を受け、2泊3日の有意義なホームステイを過ごしました。昨年に引き続いての山梨開催でしたが、天候にも恵まれ、参加者たちはホストファミリーの心づくしの歓待を受け、日本の文化を満喫すると共に、一生心に残るであろう国際交流、人と人との交流を体験しました。

学生の一人は次のような情景を伝えています。

「でも様々な理由のために、甲府サッカーチームは試合に負けました。本当に残念でした。私はいつも甲府チームを応援します。家へ帰る途中で花火が見えました。ロマンチックでした。夜飯を済ませた後、携帯電話のソフトで私の両親とKさんの家族が会話を楽しみました。言葉の壁があっても、とても楽しかったです。私の母は大連に住んでいて、画面を見ながら、仲良くしてくれてありがとうございます、と中国語で言いました。」（原文の一部ママ）

■機関関係

(1) 平成24(2012) 年度事業報告

1. 教育交流・派遣事業

- ① 第6期安東自由大学は、4月に東京セッション、9月に大邱セッションの2回行なわれました。協会は主として教育学部として、9月2日から6日まで、大邱セッションに芹沢団長以下8名が参加しました。8月に事前学習会を開催し、安東自由大学の歴史的、地理的意義を確認の上、団員は積極的に安東自由大学に参加し、友好と相互理解を深めました。大邱セッションでは、日本側から「東アジアにおける国際教育の課題」、韓国側から「韓国における多文化政策」の報告をもとに討論が行われました。
- ② 第16次訪中団は、11月4日から10日までの日程で予定されていましたが、10月15日、受け入先である中国宋慶齡基金会から、訪問先の準備の関係で派遣延期の申し出があり、検討の結果、訪中派遣を見送ることとしました。
- ③ 2月25-27日、黒田代表理事ら協会理事4名は、中国宋慶齡基金会、中国教育国際交流協会、中国教育工会を訪問し、今後の事業の継続と発展を確認しました。黒田代表理事は平成25年度の宋慶齡基金会教育代表団を招へいしました。また、宋慶齡基金会李寧秘書長から、共同プロジェクトの支援地域について新たな提案がありました。

2. 教育交流・受入事業

平成25年度の宋慶齡基金会教育代表団の訪日招へいに伴い、『2012第4回河北省易県音楽教師養成セミナー』に、黒田代表理事ほか協会1名、三重県の公立学校長、教員、教職員団体ら計5名が参加しました。また、2011年度訪日した教師の学校を視察し、2011年の神奈川での交流を生かした音楽クラブの活動を参観しました。

3. 教育交流・支援事業

8月20-22日、黒田代表理事、吉田業務執行理事は『2012第4回河北省易県音楽教師養成セミナー』、並びに宋慶齡基金会との共同プロジェクトによって寄贈した電子キーボード・机・椅子の使用状況を視察しました。参加した100名の教師からは、「音楽授業を通して、子どもたちの勉強意欲が高まった」「音楽専科が少ない中、教師の意欲の高まりがある」「電子キーボードに子どもたちは大変関心がある」などの感想が寄せられました。セミナーの場で、日本の音楽教育についてレポート発表を行いました。このプロジェクトに協会からセミナーの諸経費として100万円、易県への電子キーボード・机・椅子などの学校備品支援相当分150万円を支援しました。北京では中国宋慶齡基金会李希奎副秘書長と会談しました。

4. 教育交流・研究等助成事業

- ① 『田中一郎記念奨学基金』の事業の準備として、本年度からホームステイ事業を実施しました。「第1回教育交流ホームステイ」は8月17-19日まで山梨県の教職員をホストとして実施されました。参加学生は、5名。貴重な体験ができ、日中友好の新しい交流の形を作り上げることができました。
- ② 第8回「日本語作文コンクール」(日中交流研究所・日本僑報社主催)は、中国全土から2648本の応募があり、中国青年の日本語学習の期待を集めています。協会はこのコンクールを後援し、社会人・学生各1名に表彰状並びに、副賞として各5万円相当の賞品を「教育賞」として授与しました。このコンクールは、草の根交流の代表例として、今年NHK初め多くのマスコミに取り上げられました。
- ③ 6月、中国大使館公使参事官による講演会(演題「最近の日中交流に思うこと」)を行いました。

5. その他の活動

今期は理事会を4回、評議員会を2回、監査を1回開催しました。また、4月18日、評議員選定委員会を開催しました。

1月28日、制度検討・役員選考委員会（前寫座長）を開催しました。

2月15日、事業計画懇談会を開催しました。日中関係が困難な中、草の根交流・民間交流は今こそ力強く進められるべきだとの意見が多く出されました。

他に協会として、中国大使館主催レセプション、中国大使館教育処主催新年交歓会、フジ国際語学院卒業式に出席しました。

広報関係では、平成25年1月に『会報19号』を発行し、「共生力」（随時刊）は、16（7月）・17（10月）・18（3月）号を発行しました。協会ホームページも随時更新しました。

（２）平成25（2013）年度事業計画

昨年度は、日中国交回復40周年にもかかわらず、日中交流に大きな影が差し込みました。

そんな中、協会は東アジアでの草の根教育交流を多様に発展させました。中国河北省易県での第4回音楽教師養成セミナーは、一昨年、協会20周年記念事業で来日した易県音楽教師たちの教育実践に還元され、地域の教育の発展に大きく寄与しました。また、第6期安東自由大学を成功させると共に、中国人留学生と日本の教職員家庭との友好を深める「教育交流ホームステイ」事業を新たに開始させました。

今後とも協会は、公益財団法人として日本と中国を中心にした東アジアの教育交流事業を一層進めてまいります。

1. 教育交流・派遣事業

- ① 本年度は、2014年度第16次訪中団派遣のための準備を進めます。
- ② 韓国、東アジアとの市民レベルでの教育・文化交流をすすめるため、第7期安東自由大学（9月予定）への派遣を行います。

2. 教育交流・受入事業

- ① 2013年度に、現場音楽教師を中心とした「宋慶齡基金会教育代表団」受入れのための準備を進めます。
- ② 中国教育国際交流協会、中国宋慶齡基金会及びその他の教育諸団体から派遣する団体の教育交流、学校参観などの手配を行います。

3. 教育交流・支援事業

- ① 宋慶齡基金会との共同プロジェクトとして、河北省易県教育局が開催する「2013年（第5回）音楽教師養成セミナー」への支援および視察を行います。
- ② 宋慶齡基金会との共同プロジェクトによる河北省易県小中学校へ電子キーボードなど教具の支援を行います。

4. 教育交流・研究等助成事業

- ① 日本語作文コンクール（日本僑報社・日中交流研究所主催）の後援を継続します。
- ② 第2回教育交流ホームステイを実施します。
この費用は、田中一郎記念奨学基金をもって充てます。
- ③ 教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させるため「国際教育交流会議」を検討します。

5. 機関運営などに関して

- ① 理事会、評議員会を年2回、監査委員会を年1回、常務理事会・事務局会を随時行います。
- ② 会報20号を発行します。また『共生力』（A4判2ページ）を随時発行します。また、ホームページの充実を図ります。
- ③ 『公益財団法人制度改革・役員選考委員会』を継続し、事業の発展のための意見を出し合うとともに、役員等の選考、協会の組織についての検討を進めます。
- ④ 会員を拡大し、事業推進に関する理解を深めるために、引き続き代表理事のもとに、「事業計画懇談会」を設置します。

(3) 平成25(2013)年度収支予算書

平成25年4月1日から平成26年3月31日まで (単位: 円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
① 基本財産運用収入	30,000	30,000	0	
② 特定資産運用収入	4,150	4,300	-150	
③ 会費収入	6,800,000	6,600,000	200,000	
団体会費	6,700,000	6,500,000	200,000	
個人会費	100,000	100,000	0	
④ 事業収入	600,000	3,500,000	-2,900,000	
教育交流・派遣事業	500,000	3,500,000	-3,000,000	
教育交流・助成事業	100,000	0	100,000	
⑥ 雑収入	0	6,000	-6,000	
雑収入	0	6,000	-6,000	
事業活動収入合計	7,434,150	10,140,300	-2,706,150	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	14,666,000	18,681,000	-4,015,000	
給料手当	2,340,000	2,340,000	0	
旅費交通費	6,050,000	10,000,000	-3,950,000	
通信運搬費	190,000	190,000	0	
消耗品費	9,000	10,000	-1,000	
印刷製本費	550,000	500,000	50,000	
賃借料	1,350,000	1,350,000	0	
諸謝金	50,000	100,000	-50,000	
教育支援費	2,000,000	2,500,000	-500,000	
研修助成費	1,200,000	1,000,000	200,000	
委託費	630,000	470,000	160,000	
会議費	130,000	95,000	35,000	
交際費	150,000	110,000	40,000	
雑費	17,000	16,000	1,000	
②管理費支出	3,615,000	3,750,000	-135,000	
給料手当	780,000	780,000	0	
会議費	200,000	250,000	-50,000	
交際費	100,000	100,000	0	
旅費交通費	800,000	850,000	-50,000	
通信運搬費	100,000	100,000	0	
什器備品費	100,000	100,000	0	
消耗品費	50,000	60,000	-10,000	
印刷製本費	30,000	50,000	-20,000	
賃借料	550,000	550,000	0	
租税公課	5,000	10,000	-5,000	
委託費	850,000	850,000	0	
雑費	50,000	50,000	0	
事業活動支出合計	18,281,000	22,431,000	-4,150,000	
事業活動収支差額	-10,846,850	-12,290,700	1,443,850	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
①特定資産取崩収入	10,000,000	9,411,038	588,962	
訪中派遣費用準備資金	0	2,000,302	-2,000,302	
教育交流支援費用準備資金	2,000,000	2,494,030	-494,030	
教育交流事業資金	8,000,000	4,916,706	3,083,294	
投資活動収入計	10,000,000	9,411,038	588,962	
2. 投資活動支出			0	
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	10,000,000	9,411,038	588,962	
III 財務活動収支の部			0	
1. 財務活動収入			0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出			0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出	553,150	260,338	292,812	
当期収支差額	-1,400,000	-3,140,000	1,740,000	
前期繰越収支差額	1,635,743	3,140,000	-1,504,257	
次期繰越収支差額	235,743	0	235,743	

(4) 平成25 (2013) 年度役員・評議員名簿

公益財団法人日本中国国際教育交流協会 理事・評議員・監査・顧問

(2013年11月 1 日現在)

理 事 (10名)

赤 岡 直 人
伊 藤 宏 美
黒 田 文 男 (代表理事)
鈴 木 伸 昭
初 岡 昌一郎
細 井 篤 志
前 寫 徳 男
山 中 正 和 (業務執行理事)
吉 田 一 徳 (業務執行理事)
渡 邊 泓 美

評議員 (8名)

井 上 定 彦
宇佐美 真
清 水 秀 行
杉 山 美津夫
田 沢 憲
藤 友 公 則
別 所 勝 也
山 中 小 白

監 事 (3名)

祝 迫 規 之
芹 沢 秀 行
丸 光 昭

顧 問 (2名)

興 石 東
生 井 榮 一

■協会の歩み

設 立 1991年1月 1992年財団法人認可
公益財団法人移行 2010年8月9日
創 立 者 田中 一郎（初代理事長）
第2代理事長 生井 榮一
代 表 理 事 黒田 文男（第3代2010年4月～現在）

教育交流・派遣事業

1992 私立学校教職員訪中団（北京、大連）
第1次教育訪中団（北京、杭州。李鉄映国家教育委員会主任と会見）
1993 第2次教育訪中団（北京、瀋陽、撫順、大連。倪全人代常務副委員長会見）
1994 第3次訪中団（昆明、成都）
1995 第4次教育訪中団（ウルムチ、トルファン）
協会理事訪中団（北京。国家教育委員会、中国教育国際交流協会訪問）
1996 第5次教育訪中団（済南・青島、蘇州）
1997 第6次教育訪中団（日中国交正常化25周年、財団設立5周年記念 北京、天津、常州、蘇州。朱国家教育委員会主任と会見）
1998 第7次教育訪中団（北京、ハルビン、長春）
1999 第8次教育訪中団（南京、杭州、上海）
2000 第9次教育訪中団（昆明、大理、麗江）
2001 第10次教育訪中団（西寧、西安）
2002 第11次教育訪中団（日中国交正常化25周年記念。南寧、桂林）
2004 第12次教育訪中団（北京、承德）
2006 第13次教育訪中団（北京、天津）
2007 第1期安東自由大学参加団（韓国・安東市）
2008 第14次訪中団（北京、河北省易県）
第2期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）
2009 第3期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）
2010 第15次訪中団（北京、河北省易県）
2011 第5期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）
2012 第6期安東自由大学参加団（韓国・安東、大邱、ソウル）
2013 第7期安東自由大学参加団（韓国・安東、ソウル）

教育交流・受入事業

1992 中国教職員訪日代表団（東京、三重、神奈川、愛知、茨城、山梨、千葉、静岡）
1993 寧波市訪日団（東京、茨城、群馬、千葉）、常州市訪日団（兵庫、福井、三重）、寧夏自治区訪日団（愛知、富山、新潟）、中国教育国際交流代表団（東京、神奈川、静岡、神奈川、京都、奈良、兵庫、大阪。赤松文相と会談）
1994 江蘇省小学校長訪日団（神奈川、山梨、静岡）
1995 湖南省訪日団（愛知、静岡、三重）、蘇州市訪日団（千葉、神奈川、山梨）

1996 モンゴル赤峰市職業教育代表団（東京、北海道）、常州市訪日団（千葉、山梨、東京）、卒業生就職指導訪日団
1997 日中国交正常化25周年、財団設立5周年記念教育交流訪日団（東京、愛知、三重）
1998 蘇州市・昆山市訪日団（東京、福井、千葉）、常州市訪日団（東京、山梨、三重、京都、奈良、大阪）
1999 北京市第二実験小学校訪日団（東京、神奈川、京都、大阪）、中国優秀教師訪日団（東京、静岡）
2000 雲南教育学会訪日団（東京、山梨、千葉）
2001 中国教育交流訪日団（東京、山梨、奈良、京都、大阪）
2002 中国特殊教育工作者代表団（東京、三重）
2003 北京市崇文区教育関係者訪日団（東京、山梨）
2006 協会設立15周年記念中国教育国際交流訪日団（東京）、遼寧省体育訪日団（東京、神奈川、滋賀、大阪）
2008 中国宋慶齡基金会教育代表団（第1次）（東京、静岡、愛知、京都）
2009 中国宋慶齡基金会李寧秘書長、協会を訪問
2011 協会設立20周年記念中国教育国際交流協会訪日団、中国宋慶齡基金会教育代表団（第2次）（東京・神奈川）
2012 中国宋慶齡基金会唐聞生副主席、協会を訪問
2013 第3次宋慶齡基金会教育交流代表団（三重、京都）

教育交流・支援、助成等の事業

1995 中国人日本留学生に奨学奨励金制度を設ける。
1996 雲南省災害教育復興資金（100万円）を贈る。
1997 協会設立5周年記念教育交流集会・レセプション（東京）
1998 長江水害見舞金（100万円）を中国教育国際交流協会を通じて贈る。松花江水害見舞金（50万円）を黒龍江省教育委員会を通じて贈る。
1999 韓国中学校教育協議会名誉会長嚴圭白博士と田中会長・理事長会見。
2001 中国教育国際交流協会20周年式典で、田中会長・理事長が顧問に就任。協会設立10周年記念教育交流集会（文部省後援・東京）
2002 日中国交正常化30周年記念教育交流集会・レセプション（文科省・中国大使館教育処後援・東京）
2006 協会設立15周年記念教育交流集会・レセプション（文部省・中国大使館教育処後援・東京）協会代表、中国宋慶齡基金会、河北省易県を訪問。
2007 生井理事長が中国宋慶齡基金会胡啓立主席と会談。河北省易県小学校へ机椅子600セット及び電子キーボード40台（総額200万円）の教育支援及び音楽教師養成セミナー支援。協定書締結。
第3回「中国人の日本語作文コンクール」を後援、教育賞を提供。
2008 四川大地震に対し、見舞金（100万円）を中国教育国際交流協会を通じ四川教育国際交流協会へ。同じく見

舞金（50万円）を宋慶齡基金会を通じて贈る。また、ミャンマーサイクロン被害見舞金（50万円）をビルマ日本事務所を通じて送る。

第4回「中国人の日本語作文コンクール」を後援、教育賞を提供。日本教育公務員共済会より易県教育支援に関し、本部奨励金（100万円）を受ける。

2009 第1回音楽教師養成セミナー参加（北京、河北省易県）
第5回「中国人の日本語作文コンクール」後援。

2010 公益財団法人日本中国国際教育交流協会へ移行。
第2回音楽教師養成セミナー支援・参加（70万円）
第6回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。

2011 第3回音楽教師養成セミナー支援・参加（100万円）
第7回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。フジ国際語学院スピーチコンテスト協賛。東日本大震災支援「こども音楽再生基金」へ寄附（100万円）

2012 協会代表（黒田代表理事）以下4名が中国宋慶齡基金会（李寧秘書長）、中国教育国際交流協会（林佐平副秘書長）、中国教育科学文化衛生体育工会（万民東主席）を訪問。

第4回音楽教師養成セミナー支援（250万円）

第1回教育交流ホームステイ（in 山梨）実施。

第8回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。フジ国際語学院スピーチコンテスト協賛。

2013 第5回音楽教師養成セミナー支援（200万円）（黒田代表理事、会員代表ら8名参加）。

第2回教育交流ホームステイ（in 山梨）実施。

第9回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。

（2013年12月現在）

公益財団法人日本中国国際教育交流協会とは

◆日本中国国際教育交流協会は

1971に創立。東アジアの豊かな未来を実現するために、日本と中国を柱として、教育交流事業を進めています。子どもや教育の持つ「共生力」に限りない期待を寄せています。

◆公益財団法人とは

広く公益に資する事業を進めている法人として2010年内閣府から認定を受けました。公益法人は、寄付金に税はかからないので、支援がしやすいのが特徴です。

◆教育交流は4つの分野で

1 派遣

教育に関心のある人たちによって構成された協会が派遣する団で、学校見学、授業の交流、子どもや教職員との交流を行い、未来の東アジアを地球規模で考えます。

2 受入

諸外国からの教育関係の訪日団を受け入れ、学校訪問等を行い、教職員や子どもたちとの交流を深めています。訪日団の希望に沿って、教育現場の協力を得た研修への参加ができます。

3 支援

教育困難地域の学校に、机や椅子などの学校備品のほか、電子キーボードなどの教育機器を送っています。また送った機器を使って授業が進められるための研修を支援しています。支援を受け入れる団体は、行政または信頼のおける団体です。

4 研究等助成

田中一郎奨学基金を設立し、東アジアを中心に国際的な教育交流を担う人材を育成します。また、「日本語作文コンクール」「教育交流ホームステイ」などを通して、海外や日本で日本語を勉強している若者の学習を助成しています。

◆東アジアでのこの素敵な教育交流への参加をお待ちします。

個人会員	年会費	一口	3,000円
団体会員	年会費	一口	10,000円
寄付金	随時		

会員、寄附をされた団体・個人には、協会の年會報、「共生力」（随時発行の会報）、海外派遣への先行連絡、イベントのご案内など差し上げます。

編集後記

日中韓の間には、今、良い風が吹いていないという見方がある。

東アジアの交流には、古来からいつも風が関係していた。

あるときは、風待ちをし、次の機会を待った。またあるときは、潮の流れを見定めて出帆した。いつの時代も勇気ある東アジアの人々は、互いの文化を何よりも大切に考え、交流を途絶えさせることはなかった。

私たちの教育交流も、先達に学び、人と人との心を結びつけるものでありたい。(J)

■公益財団法人日本中国国際教育交流協会【会報第20号】

2014年(平成26年) 1月15日発行

発行人…黒田文男 表紙題字…田中一郎(創立者) 印刷…(株)東京文久堂

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-3-9 第二太陽ビル301

Tel. 03-3222-4190 Fax. 03-3222-4199

HP. <http://www3.ocn.ne.jp/~koryu/>

